

年報 2021



Vol.14



医療法人財団 華林会

村上華林堂病院

巻頭言

医療法人財団華林会 村上華林堂病院
理事長 菊池仁志

2021年度の村上華林堂病院の年報をお届けさせていただきます。

2020年当初より始まった新型コロナウイルスのパンデミックは、2022年に入ってもやむことなく、日本でもいまだ対策を強いられている現状です。新型コロナウイルスのパンデミックで世の中は大きく変化し、マスクのある生活が日常化してしまいました。そして、実際の医療現場でも感染症を主体とする診療体制に多くの労力が費やされ、通常診療に少なからず影響を及ぼしてきました。一方、2022年当初より流行している新型コロナウイルス・オミクロン株は、ワクチン接種の影響もあり、重症化の頻度は多くはなく、少しずつ経済活動の再開が推し進められています。これをもってパンデミックの終息を期待したいものです。しかしながら、もう一つの大きな問題があります。2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻により、平和な日常が一日にして戦場と化すという、信じられないようなことが起こっています。長期化の様相もありますが、世の中の平和のために一刻も早い終結を願っております。

2021年度は村上華林堂病院もこれまでの診療体制を維持しながらも新型コロナウイルス対策に追われる1年間でありました。発熱外来にて積極的にコロナ検査を行い、コロナ患者専用病床も4床確保することで微力ではありますが、国の新型コロナウイルス感染症対策に貢献してきました。新型コロナウイルス流行に伴い診療制限を繰り返すという不安定な1年間でありました。そのため、地域の医療・介護施設、そして患者・ご家族の皆様にはしばしばご迷惑をおかけいたしました。皆様のご協力で何とか従来の地域医療・介護を継続することができました。

まだまだ予断のできないご時世ではありますが、職員一同これからも地域医療・介護に貢献できるよう努力してまいりたいと思っております。

今後とも引き続きよろしくお願い申し上げます。

巻頭言	2
目次	
病院長挨拶	5
病院概要	
● 沿革	
● 施設概要	
● 組織図	
統計資料	
● 外来患者数 入院患者数 紹介患者数	
診療科案内	6
● 総合診療科内科	6
● 血液・腫瘍内科	7
● 脳神経内科	8
● 循環器内科	10
● 緩和ケア科	13
● 呼吸器内科	15
● 消化器内科	17
● 在宅診療部 在宅診療科	19
● 健康増進・糖尿病センター	21
● 腎臓内科・血液浄化療法センター	23
● 眼科・アイセンター	26
● 健康管理センター	28
医療技術部	29
● 薬剤科	29
● 臨床工学科	30
● 臨床検査科	32
● 栄養管理科	34
● リハビリテーション科	35
● 放射線科	37
看護部	38
● 看護部	38
● 2階北病棟	40
● 2階南病棟	42
● 3階病棟	43
● 4階病棟	44
● 緩和ケア病棟	45
● 中央材料室・手術室	46
● 外来	48
● 総合相談室	50

在宅療養部	51
● 訪問看護ステーション	51
● 居宅介護支援事業所	52
● 訪問リハビリテーション	54
● 通所リハビリテーション事業所（デイケア）	55

事務部	58
● 総務課	58
● 医事課	59
● 地域連携室	60

委員会活動	61
● 医療安全管理委員会	61
● 転倒・転落防止対策委員会	65
● 指差し呼称委員会	66
● 院内感染対策委員会	67
● 院内教育委員会	69
● サービス向上委員会	70
● N S T 兼栄養管理委員会	71
● 褥瘡対策委員会	72
● 認知症ケアチーム	73
● 地域振興委員会	75

サービス付き高齢者向け住宅かりん	76
サービス付き高齢者向け住宅かりん、訪問介護事業、通所介護事業所	

業績	79
・ 学会・研究発表・講演等	79
・ 論文・著書等	81

TQM 活動	82
---------------	-----------

病院長挨拶

医療法人財団 華林会
村上華林堂病院

病院長 司城 博志

今年度も年間の病院活動を総合的にまとめた病院年報を発刊することができました。2019年度より、病院年報を病院ホームページ上で随時閲覧していただける形式としました。ホームページの病院情報と整合性を持たせ、総合的な情報伝達力を強化することが目的です。

昨年度に引き続き今年度も、新型コロナ感染症に翻弄された1年間でした。「強固な新型コロナウイルス感染対策を整備し、病院組織と地域医療体制を堅持する」を今年度の病院年度目標の筆頭に挙げて、職員全員一丸となって感染防御に取り組みました。残念ながら、新型コロナウイルスの感染力、伝播力は凄まじいものがあり、病院内での感染クラスターが発生から、診療機能、地域の病・診連携、病・病連携機能の一時的な停滞を余儀なくされた年でもありました。

新型コロナ感染症は地域における当院の役割について改めて考え直す機会を与えてくれました。地域における当院の役割の根幹は、近隣の医療・介護・福祉施設と連携し、地域の高齢者が生活圏内で暮らし続けていくことを入院設備のある病院として総合的に支援することです（地域包括ケアシステムを支える病院）。

これからは、コロナ禍においても感染防御と通常の医療機能提供体制を両立させることに全力を注いでゆきたいと思います。地域における当院の役割を全職員で共有し、地域の中核施設として地域の医療・介護施設との連携体制の推進、地域包括ケアシステムの構築の推進に向けて努力していく所存です。

これからも地域の方々と共に歩んでいく病院、安心感を提供できる病院、患者さんご家族、近隣の医療・介護・福祉施設の方々が気持ちよく利用できる病院を目指してゆきたいと思います。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

総合診療科内科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

総合診療科内科部長 柴田 隆夫（総合内科専門医、病院総合診療学会認定医）

総合診療科内科は、2021年度 18名の常勤医師・11名の非常勤医師で診療を行っており、新患総合外来、各専門外来、検査、入院治療を行っております。当院の特徴としては、地域に根差した診療を主体として、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、血液内科、神経内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科の主要専門医がそろい、様々な疾患の患者様に対応させていただいております。末期腎不全や悪性腫瘍の患者さんも増えてきております。コロナ感染症にて一般診療が影響を受けていましたが発熱、上気道症状患者に対する検査、診療体制を充実させ動線を分離して内科診療への影響を最小限にいとめましたがそれでも患者さんの診療に影響がでました。従来の専門性縦割りの内科から全人的医療を行うべく総合診療科内科を基本として診療し地域における当院の役割を果たし、近隣医療機関や施設、地域の皆さんとの連携を大切にして、より良い医療を提供するべく努力していく所存です。

（柴田 隆夫）

2. 臨床実績

2021年度 主な内科疾患入院患者（延べ人数）	
症例別入院患者数	総計 1297名
循環器内科疾患	134名
消化器内科疾患	117名
神経内科疾患	456名
呼吸器内科疾患	125名
血液内科疾患	111名
悪性新生物疾患	55名
内分泌・代謝疾患	67名
腎・泌尿器疾患	72名
その他	160名

血液・腫瘍内科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

血液腫瘍内科部長 柴田 隆夫

非常勤医師 高松 泰（福岡大学病院 腫瘍・血液・感染症内科教授）

2. 臨床実績

年間疾患診療（2021/4/1-2022/3/31）

血液悪性疾患(124例) (うち入院67例)

1. 悪性リンパ腫	49 (19) 例
2. 多発性骨髄腫	30 (16) 例
3. 急性骨髄性白血病	9 (9) 例
4. 急性リンパ性白血病	1 (1) 例
5. 成人T細胞性白血病/リンパ腫	9 (6) 例
6. 骨髄異形成症候群	21 (16) 例
7. 慢性骨髄性白血病	3 (0) 例
8. 慢性リンパ性白血病	1 (0) 例
9. 原発性マクログロブリン血症	1 (0) 例

血液良性疾患(12例) (うち入院1例)

1. 再生不良性貧血	1 (0) 例
2. 特発性血小板減少性紫斑病	8 (1) 例
3. 血管性紫斑病	1 (0) 例
4. 特発性赤芽球癆	2 (0) 例

3. 1年間の活動と今後の展望

当院では比較的高齢の血液悪性疾患の方が多く、活動度に支障をきたしていることが多いため、入院して専門的な治療を行いながらリハビリテーションを進めていき、活動性に改善が得られれば外来化学療法に訪問看護、訪問診療などを活用していただき在宅療養までバックアップし、合併症などで治療の必要が生じたときにはいつでも緊急入院していただける態勢を整えています。また難治、再発の血液悪性疾患や固形腫瘍の方では、緩和的化学療法や疼痛コントロールを中心とした緩和医療にも重点をおき、プライマリーケアも含めてトータルライフケアのできる診療部門を目指して医療スタッフがチームを組んで取り組んでいます。

(柴田 隆夫)

脳神経内科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

理事長	菊池 仁志
脳神経センター長	山田 猛
脳神経内科部長	古田 興之助
医師	籠田 早織
医師	白川 佐智子
兼任医師（在宅診療部）	田代 博史
その他	非常勤医師

2. 臨床実績

2021年度 神経系疾患（2021年4月～2022年3月退院患者）	
パーキンソン病（含：分類不能症候群）	173
多系統萎縮症	50
筋萎縮性側索硬化症・原発性側索硬化症	38
進行性核上性麻痺	24
大脳皮質基底核変性症	23
認知症（含：レビー小体型認知症）	20
多発性硬化症・視神経脊髄炎	17
脳血管障害	15
脊髄小脳変性症	11
骨・関節疾患	10
プリオン病	6
めまい症	4
脳症・脳炎	4
頭部外傷	4
筋疾患・重症筋無力症	3
水頭症	3
廃用症候群	3
末梢神経疾患	2
てんかん	2
感染症	39
その他	13
計	464

3. 1年間の活動と今後の展望

当院の脳神経内科は、1982年の開院当初より診療を行ってきました。福岡市の脳神経内科医療は東区の九州大学病院と城南区の福岡大学病院が高度専門医療を担っています。脳卒中のような急性期診療を担う総合病院は中央区と隣接する南区、早良区、東区に集中しており、西区では白十字病院があります。パーキンソン病、パーキンソン症候群、筋萎縮性側索硬化症など

の神経難病は、慢性期の医療を長期にわたり提供する必要があり、基幹的な総合病院では対応しにくく、専門医療機関は未だ乏しい状況です。菊池仁志現理事長が赴任してからは、神経難病の専門病院として、患者・家族に質の高い慢性期医療を提供してきました。

入院診療実績は、障害者病棟での神経変性疾患患者を主体とし、疾患構成は従来通りで、パーキンソン病およびパーキンソン症候群が多いです。高齢化の進行に伴い入院患者数は増加傾向にあります。入院での集中的なリハビリテーションや定期的なレスパイト入院により、在宅療養を支えることができます。

リハビリテーション室とスタッフが充実しており、特にパーキンソン病に特化したLSVT (Lee Silverman Voice Treatment)は患者から高評価を得ています。通院でのリハビリテーションにも対応しています。

神経難病では(嚥下性)肺炎や尿路感染症の合併が多く、現状では新型コロナ感染を鑑別する必要があります。発熱患者の対応では、患者さんにご不便をおかけしましたが、抗原検査とPCR検査の導入により、入院受け入れがスムーズにできるようになりました。新型コロナワクチンの普及により、2022年度から九州大学医学部学生の見学実習が再開されます。当院では、大学病院や急性期病院では経験できない慢性期や進行期の神経難病の療養について学ぶことができます。

神経難病の治験やケアの向上に役立つ臨床研究は進めていきたいと考えています。脳神経内科専門医療機関の少ない福岡市西部～糸島地区において、当院は脳神経内科の地域医療を近隣の医療機関とともに支えています。

(山田 猛)

循環器内科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

副院長・循環器内科部長	星野 史博	
非常勤医師	有村 忠聰	（福岡大学病院 循環器内科）
非常勤医師	田代 浩平	（福岡大学病院 循環器内科）
非常勤医師	桑野 孝志	（福岡大学病院 循環器内科）
非常勤医師	清水 真行	（福岡大学病院 心臓血管外科）
非常勤医師	和田 秀一	（福岡大学病院 心臓血管外科教授）

2. 臨床実績

循環器専門研修関連施設および高血圧学会認定研修施設を維持し、循環器専門医1名と循環器内科専門医3名（福岡大学病院非常勤）、心臓血管外科医2名（福岡大学病院非常勤）の体制で外来診療および病棟業務を継続しました。心臓リハビリテーション（以下、心リハ）は、平成25年1月から心大血管疾患リハビリテーション科I(心I)の施設基準を維持しています。

外来：

患者数は総数 6406（前年 6586 名）（月平均の平均：533 名 549（656）名、非常勤医師を含む）であり新型コロナ感染流行下ではありますが前年と比較し大きく変化を認めません（表1）。心臓リハビリテーション対象者も30名/月程度を維持でき、非常勤医師（福大循環器内科および心臓血管外科）の一定数の紹介数が確保でき稼働維持が出来ました。引き続き感染対策に病院をあげて一層の努力を行いつつ、今後も更なる増患にも対応できるようスタッフ一同努力して参ります。

入院：

循環器疾患のみの入院数は、134名（前年 150名）と減少し、外来患者数の減少と乖離しており、これには非常勤医師の増員や近隣医療施設からの紹介が増えたことが要因と考えます。

内訳として昨年と同様に高齢者の心不全（HFpEF）再発症例と術後もしくは急性期治療後の心リハ対象者の転院が圧倒的に多く、心不全の基礎疾患としては不整脈や左室拡張障害、弁膜症、慢性腎不全の増悪に伴うものでした（表2）。入院加療を必要とした心不全症例は50名（前年 69名）であり、入院退院を繰り返す高齢者の心不全患者が明らかに増加していました。その背景には、COVID-19の感染を経過した患者さまが自宅での生活や受診控えとなりフレイルに移行する、適切なタイミングでの受診が出来なくなった、他者とのコミュニケーションが減り抑うつ状態に至る、などの特殊な生活環境下にあった影響が大きいと拝察されます。外来での心リハもCOVID-19感染の対策にて縮小せざるを得ず、①EBMの示す通り患者の体力向上やうつなどの精神面でのサポートができずに悪循環となったこと、②今まで可能であった1~2回/週の心リハが出来ずに問題のある症例において細やかな投薬調整や栄養・服薬指導、患者教育が定期的に行えず早期の心不全治療介入が出来なかったこと、挙げられます。

尚、入院および外来の心リハ対象者は、入院 230（246）名、外来 91（98）名/年と減少（表3）しており昨年の特殊な状況を引き継ぐ結果となりました。

転院での受け入れ症例は、術後もしくは急性期治療後の心リハ対象者もしくは緩和ケアを見

据えた治療抵抗性心不全患者の転院（福岡大学病院ハートセンターや福岡記念病院、九州医療センター心臓血管外科など）が大多数を占め、自宅退院が困難な症例に際しては当院の大きな特徴である在宅診療や訪問看護への移行や近隣の療養型病床への転院も当院地域連携室を介した流れも COVID-19 の流行下で大きな制限があり苦慮する症例も多々あります。

検査：

昨年と明らかに減少しておりますが（表 4）、検査技師の技術向上に裏付けられた質の向上は継続できており今後も安定した実績を堅持する体制が出来ています。

手術：

ペースメーカー移植術の対象となる症例（電池交換術を含む）は 34 件（前年 33 件）と症例数に変わりありませんでした（表 5）。当科ではクリーンルーム下での PMI 施行ですので術後感染などの complication は殆どなく、今後も積極的にペースメーカー移植術に取り組んで参ります。

表 1 2021 年度 循環器科外来延べ患者数

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計	平均
569	512	521	536	531	541	541	514	593	501	470	577	6406	533.8

表 2 2021 年度 循環器系疾患入延べ院患者数

心不全	50	
ペースメーカー電池消耗	11	
心房細動	10	
高血圧症	8	
大動脈瘤及び解離	7	
心筋梗塞	7	
洞不全症候群（不整脈）	6	
心筋虚血	5	
房室ブロック	4	
心筋症	3	
低血圧症	3	
下肢閉塞性動脈硬化症	3	※該当者数が 3 名以上の病名を挙げています
僧帽弁閉鎖不全症	3	※2 名以下の病名は【その他】に入れています
狭心症	3	
その他	11	
総 数	134 名	

表3 2021年度 心大血管算定患者数 (件数)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
外来	23	21	20	21	18	18	17	19	18	18	19	18
入院	8	11	8	6	8	5	5	16	9	5	7	13

表4 2021年度 検査件数

心エコー	823件
ABPM	18件
CAVI	297件
経食道エコー	4件
運動負荷心電図	12件
ホルター心電図	161件
中心血圧	169件

表5 2021年度 ペースメーカー手術件数

ペースメーカー移植術	15例
ペースメーカー交換術	9例
体外ペースメーカーキング	2例

3. 1年間の活動と今後の展望

昨年と同様に COVID-19 感染拡大に伴い、当院での通常診療も外来や入院、さらには転院調整においても制限され非常に患者さまには迷惑をかけた1年となりました。

福岡大学病院からの非常勤医師(循環器内科、心臓血管外科)派遣にて専門外来は維持でき、来年度は循環器専門医1名が入職する予定であり、福岡大学病院などの高次医療機関との密なる連携、近隣の療養型病床を有する医療機関や施設などとのスムーズな連携を確立できる体制造りを行う所存です。

(星野 史博)

緩和ケア科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

緩和ケア科部長、病棟医長	司城 博志
医 師	柴田 隆夫
医 師	工並 直子

2. 臨床実績

昨年1年間の「緩和ケア病棟」の入院数は193名（男性100名、女性93名）、入院時の年齢は49歳から95歳で平均年齢は74.9歳でした。悪性腫瘍の種類は例年とほぼ同じく、肺癌、胃癌、膵癌などが主でした（表1）。患者さんの地区別の入院状況でも例年と同様、福岡市西区、早良区、糸島市で全体の92.7%を占めていました。これは2012年の77%に比べて増加しており、「緩和ケア病棟」が患者さんやご家族の生活基盤がある地域に密着した施設であることを示しています。（表2）。「緩和ケア外来」には、昨年度105名の患者さんを紹介していただきました。昨年度の緩和ケア病棟在宅復帰率は21.1%でした。

表1：ホスピス・緩和ケア病棟の入院患者の原疾患別分類

肺癌	42例
食道・胃癌	24例
大腸・直腸・肛門癌	27例
肝・胆・膵癌	39例
乳癌	8例
その他（子宮癌、卵巣癌、頭頸部癌）	53例

表2：ホスピス・緩和ケア病棟の地域別入院状況

福岡市西区	49.2%
福岡市早良区	43.0%
糸島地区	0.5%
その他の福岡市	5.8%
その他	1.5%

3. 1年間の活動と今後の展望

昨年度に続き、今年度も新型コロナウイルス感染症が緩和ケア病棟の運営にも大きな影響を与えた1年でした。感染防御の観点から、家族の面会、付き添い、患者さんの外出・外泊の制限を余儀なくされました。残り時間が限られた患者さんとその家族にとって、家族として過ごす時間が、かけがえのない大切なものであることを実感しました。コロナ禍で患者さんとその家族の切実なニーズを目の当たりにして、地域における緩和ケア病棟の役割について改めて考えさせられた1年でした。

緩和ケア病棟にとって最も大切なことは、終末期の患者さん・家族の様々なニーズに、より善く応えることです。病気が治らない困難な状況を生きている患者さんは、治らないということ

は仕方がないことだが、最期の時を迎えるときまで、毎日を安心して自分らしく生きてゆきたい、自分なりに納得して生活してゆきたいと真摯に希望されていると思います。
これからも、訪問看護、訪問診療との協力・補完体制の充実、親切で細やかな対応など、患者さんご家族、近隣の医療機関の皆様方のご要望にしっかり応えられるように努力してゆきたいと思います。

(司城 博志)

呼吸器内科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

呼吸器内科部長 有富 貴道
 非常勤医師 串間 尚子（福岡大学筑紫病院 呼吸器内科）

2. 2021年度呼吸器疾患（入院・外来）

疾患名	外来	入院	疾患名	外来	入院
かぜ症候群		2例	肺線維化疾患		7例
かぜ（感冒）	308	2	間質性肺炎	66	7
上気道炎	139	0	サルコイドーシス	8	0
インフルエンザ	0	0	胸膜疾患		12例
感染性疾患		168例	胸膜炎		
肺結核症（陳旧性を含む）	59	2	結核性胸膜炎	1	0
肺炎			癌性胸膜炎	7	0
細菌性・肺化膿性	69	27	胸水	105	12
（マイコプラズマを含む）	0	0	膿胸	1	0
非細菌性	275	139	自然気胸	17	0
（誤嚥性を含む）	87	93	肺循環障害		0例
閉塞性肺疾患		35例	肺水腫	2	0
気管支喘息	656	8	換気異常		10例
慢性閉塞性肺疾患（COPD）	147	20	睡眠時無呼吸症候群	103	10
慢性気管支炎（非閉塞性）	334	7	睡眠時呼吸障害	0	0
拡張、嚢胞性肺疾患		3例	過換気症候群	7	0
気管支拡張症	77	2			
無気肺・嚢胞など	31	1			
腫瘍性肺疾患		33例			
肺がん（原発性・転移性）	129	33			
縦隔腫瘍	3	0			
合計			270例		

3. 1年間の活動と今後の展望

【診療科案内】

呼吸器専門内科の外来診療は月、火、水曜日の午前中、更に木曜日、金曜日午後には有富が担当（土曜日第1, 第3午前中）、また福岡大学病院から串間尚子先生にて木曜日午前中に呼吸器疾患に関して専門に診療行い、更に健康診断の胸写異常要精密の依頼やCT検査も行っています。また睡眠時無呼吸症候群についてはCPAP（シーパップ：持続陽圧呼吸療法）導入患者の適応基準のための入院検査や装着患者の日常管理を特に水曜日に行っています。新患も各診療時間に合わせて相談や診療にあたっています。他に職員検診や来院される健康診断の胸部X線のチェックを行い健康管理の一部を担っています。

2021～2022 年も引き続き COVID-19 が猛威を振るっています。当院でも外来や入院での高齢者入院が多く、重症化もきたし易いので注意が必要ですが感染の終息はまだのようです。ワクチン接種も 3 回目になり徐々に感染も減少傾向かもしれませんが、将来インフルエンザ並みに流行し予防接種も毎年必要になるという報告もあります。当院でのコロナ発症陽性患者に対し軽症者に保健所の要望で自宅待機の健康状態のチェックを 2, 3 日後の経過観察で電話対応をさせてもらっています。以前に比較し軽症で最近では後遺症も少なくなってきました。胸写等でも 2021 年初頭は異常影が多く認められましたが、自宅待機患者では若者が多いせいもあり、症状が消失していて元気な方が多くなりました。ウイルスの株が段々異なって来ていることも実感させられています。しかし外来、入院と今後も目が離せない状況ではあります。

さて 2021 年度の外来・入院患者数を表に示しています。今年度は呼吸器疾患に関して 2019 年度より患者数が減少していますが、減少の一つにはインフルエンザが更に激減してきていますし、二次感染の肺炎も減っています。マスクやうがい、人込みを避ける等の公衆衛生が大事なことがこれで証明されました。

呼吸器疾患の入院はコロナ感染によって、かえって院内で感染の機会が増えるとかで入院を拒絶されることが多く、入院制限もあり全体的に減っています。しかし専門外来が周知されていることや、自覚症にてコロナも心配なのでしょうか、呼吸器に対する問い合わせは増えています。

【方向性と展望】

今後も高齢者は増えるのは間違いなく、種々の疾患に罹患して相談の機会も増え続けています。特に 1. 慢性閉塞性肺疾患 (COPD) と気管支喘息、2. 肺癌、3. 睡眠時無呼吸症候群 (SAS) について外来診療を増やして行って、更に各々に全身状態の把握のための健診の機会も担って、他の合併症も併せて診療することで当院の全科がそろっていることの利点を啓蒙していきたいと思います。

また毎度お願いしていますが他の外来での胸写異常や咳嗽・喀痰の出現、呼吸困難、胸痛等に伴う発熱について診療や相談に乗りたいと思いますので紹介をお願いします。

(有富 貴道)

消化器内科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

消化器内科部長 小山 洋一
医 師 司城 博志
医 師 横山 昌典
非常勤医師 山嶋 友美（福岡大学病院 消化器内科）

2. 臨床実績

2021年度消化器内科実績

【肝疾患】

C型肝炎に対するインターフェロンフリー療法	約10例
B型肝炎に対する核酸アナログ製剤	約23例

【内視鏡】

上部消化管内視鏡検査	899例
下部消化管内視鏡検査	243例
内視鏡的止血術	2例
内視鏡的大腸ポリープ切除術	27例
内視鏡的食道静脈瘤結紮術	1例
内視鏡的胃瘻造設術	8例
内視鏡的胃物除去	1例

計 1181例

3. 1年間の活動と今後の展望

消化器内科は3人の常勤医師と1名の非常勤医師で、消化器疾患全般(消化管、肝、胆、膵)の診断・治療に全力をあげて取り組んでいます。

消化管は食道・胃・大腸の癌をX線・内視鏡で診断し、ポリープや早期がんは内視鏡的切除を行っています。消化管出血に対する緊急内視鏡的止血術も施行しています。なお、平成21年に受けた日本消化器内視鏡学会関連施設の認定は、以後も継続して更新しております。また最近は、近隣の病院や施設からのご依頼による内視鏡的胃瘻造設術や胃瘻チューブの交換も増加してきています。

肝臓疾患は平成21年に肝疾患治療専門医療機関の認定を獲得し、平成23年より日本肝臓学会関連施設の認定も受けました。C型慢性肝炎に対してのインターフェロンフリー療法、B型肝炎に対するインターフェロン療法や核酸アナログ製剤投与、自己免疫性肝炎や原発性胆汁性肝硬変に対しての免疫療法、原因不明の肝障害に対しての肝生検などを肝臓専門医が行っています。非代償性肝硬変症の難治性腹水に対し、腹水濃縮濾過再静注法(CART)も積極的に行い、患者様のADL改善に努めています。肝細胞がんは、腹部超音波検査・CTで診断し、早期肝細胞がんには、ラジオ波焼灼術も施行可能です。食道静脈瘤に対しては、内視鏡的結紮術と硬化療

法を行い、緊急吐血症例にも対応しています。また、現在4名の肝炎コーディネーターにより、肝疾患患者様への積極的な関与と管理を行っています。

胆・膵分野は画像診断で、がんの早期発見、閉塞性黄疸に対する経十二指腸的胆管ドレナージ術、胆管内の結石除去など、近隣の外科病院と連携して治療を行っています。

進行消化器がんでは手術治療が不可能な症例も、抗がん剤治療を行い、更に進行した症例では緩和ケア病棟での加療を行い、包括的な医療を提供出来るように努力しています。

(小山 洋一)

在宅診療部 在宅診療科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

在宅療養部長・在宅診療科部長	田代 博史
在宅診療兼任医師（2021年7月～）	古田 興之介
在宅診療兼任医師（2021年12月～）	司城 博志
土曜日担当医師（隔週）	籠田 早織
当院併設サ高住「かりん」担当医師	山田 猛・工並 直子
在宅コーディネーター 3名（看護師2名・在宅介護事務1名）	

2. 臨床実績

看取りの年次推移

	2019年度	2020年度	2021年度
登録総数	183名 (男61名・女122名)	171名 (男55名・女116名)	176名 (男75名・女101名)
死亡総数	52名	45名	45名
病院死亡	19名 難病：6名 癌：10名 他：3名	10名 難病：3名 癌：3名 他：4名	11名 難病：2名 癌：5名 他：4名
在宅死亡	33名 難病：10名 癌：10名 他：13名	35名 難病：8名 癌：10名 他：17名	34名 難病：2名 癌：17名 他：15名

3. 1年間の活動と今後の展望

2021年度の診療科構成については、訪問診療常勤医が1名、土曜日（隔週）担当医が1名、サ高住「かりん」担当医が2名となっていました。訪問診療兼任医師が7月より1名、12月より1名と増員しています。

2021年度において1年間の患者登録延べ総数は176名、その中で死亡総数は45名（在宅での看取りが34名で75.5%、病院内での看取りが11名で24.5%）でした。患者の登録延べ総数は前年度よりわずかに増加しています。在宅看取り数に関しては、前年度同様に30名以上を維持しており、この数年は同様の傾向です。

在宅での看取り34名の中で、高齢者施設での看取りは15名（2020年度は22名）でした。その内訳は当院併設のサ高住「かりん」が10名（2020年度は14名）、特別養護老人ホーム「マナハウス」が3名（2020年度は6名）、「お茶の間館」が1名、「明の里」が1名でした。当科では近隣の高齢者施設での看取りを支援することも重要な役割と考えていますが、前年度は施設での看取りは減少し、むしろ自宅での看取りが増加するという結果でした。

また当科では九州大学医学部6年生の在宅診療実習を定期的に受け入れてきましたが、2020年度同様、2021年度もCOVID-19感染流行に伴い実習の受け入れは行っていません。感染状況

等改善すれば 2022 年度は学生実習の受け入れを行う方針です。

在宅診療科としての基本的な方針（神経難病や末期癌の緩和ケアなど当院に特化した病院機能を支える・近隣の高齢者施設を支援する）は本年度も変わることなく、病院として行う在宅医療を継続していきたいと考えています。

（田代 博史）

健康増進・糖尿病センター科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

センター長	吉田 亮子	（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
医師	小野 順子	（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
医師	柳田 育美	（糖尿病学会認定専門医、日本内科学会認定内科医）
医師	両林 龍太郎	（糖尿病専門医研修専攻医、日本内科学会認定内科医）
医師	野中 瑠以子	（糖尿病専門医研修専攻医、日本内科学会認定内科医）

糖尿病療養指導士

20名 看護師 12名、管理栄養士 2名、栄養士 1名
薬剤師 1名、臨床検査技師 3名、理学療法士 1名

2. 臨床実績

外来および入院患者内訳

外来	総数	1791名	
糖尿病		897名	
健康増進関連、他		894名	*1
入院	総数	186名	
糖尿病		117名	*2
その他		69名	*3
入院（院内他科依頼）	総数	74名	*4

*1 高血圧、脂質異常症、動脈硬化性疾患、内分泌疾患
総合外来、救急外来を含む

*2 糖尿病教育入院教室参加数 52名
（8月は新型コロナウイルス感染症のため糖尿病教室中止）
他疾患で入院した糖尿病患者を含む

*3 健康増進関連、新患外来から入院した呼吸器、消化器、尿路系の急性期
疾患、障害者病棟や緩和ケア病棟関連の疾患

*4 入院中の併診で血糖コントロールを行った患者
（眼科短期入院中の糖尿病患者を含まない）

3. 1年間の活動と今後の展望

2014年に当センターが開設し8年目になります。本年度も福岡大学内分泌・糖尿病内科からの応援を頂き、看護師・栄養士・薬剤師・臨床検査技師・リハビリテーション（理学・作業・言語療法士）と多職種と連携をとりながら診療に携わって参りました。

2019年に始まった新型コロナウイルス感染症の影響は今年も続いており、8～9月は感染拡大のため糖尿病教室開催が困難となりました。現在も面会制限による患者さんやご家族への対面や集団での指導が不十分となっております。集団教育をどのようにしていくかを課題にしましたが、何より感染拡大防止を最優先かと思っております。感染者が少し減り、緩和されていくことを願い、昨年同様常に多職種と共にまた診療科を越え連携をとりながら患者さん一人一人に

寄り添った診療が継続はできるよう引き続き努めていきたいと思ひます。

(吉田 亮子)

腎臓内科・血液浄化療法センター

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

血液浄化療法センター長・腎臓内科部長	村田 敏晃
看護師長	1名
看護師	8名
臨床工学技士	6名
ケアスタッフ	1名

2. 臨床実績

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
外来	1392	3146	3279	4592	5543	6344	6740	7035	6807	6700	6430	6215
入院	197	532	1007	1000	684	793	815	912	1031	1173	1308	1342
延べ人数	1589	3678	4286	5592	6227	7137	7555	7947	7838	7873	7738	7557

図)2010年7月5日から2021年3月31日までの透析患者延べ人数の推移

3. 1年間の活動

(1) 腎臓内科：

外来での慢性腎臓病（CKD）患者、ステージ G3 a 以上が 54 名で、G3a:23 名（男性 6、女性 17）、G3b:18 名（男性 7、女性 11）、G4:7 名（男性 3、女性 4）、G5:6 名（男性 3、女性 3）（* 糖尿病・内分泌内科，循環器など他科併診も含む）であった。

(2) 血液浄化療法センター：

当センターでは、「安全で質の高い透析療法・看護の提供」に努め、木の素材を生かしたぬくもりがある床と大きな窓のあるフロアで、患者さんの安全で快適な透析療法を提供することを目指している。透析のシステムとして、逆浸透水処理装置、エンドトキシン捕捉フィルタ、透析溶解装置 DAD などを使用し透析液清浄化を行い、超純粋透析液（エンドトキシン濃度 0.001EU/mL 未満かつ透析液細菌数 0.1cfu/mL 未満）を作製し、配管の繋ぎ目がない PVDF 配管を使用することによって患者さんには非常に清浄化された透析液を供給している。装置は、ブラッドボリューム計が装備されている、多人数用透析装置 6 台と個人用透析装置 22 台を設置し、血液透析（HD）、血液濾過（HF）、限外濾過（ECUM）、血液濾過透析（On-line、Off-line）、AFB への対応が可能。また、必要に応じて血漿交換療法（CART、LDL-A、DFPP、単純血漿交換）なども行っている。体重測定の間違いなどが起こらないように透析通信システム Future Net II（日機装社）を使用している。治療に際しては、血液浄化関連専門医（透析専門医・透析指導医・血漿交換専門医資格あり）・透析療法従事職員研修を終了した看護師・臨床工学技士があたり、透析中の急変に備えています。

2022年3月末時点で、スタッフは、師長1人・看護師8人、臨床工学技士5人。

2021 年度、

新規患者は 9 人、内当院での新規導入患者は 4 人（昨年度 8 名）。他院で新規導入となり当院紹介となったのは 1 人（福岡大学病院腎臓膠原病内科 1）。他院で維持透析中の患者 4 人（福岡和仁会病院、松口胃腸科外科医院、むらやま泌尿器科クリニック、賀茂クリニック）が紹介外来となった。

2022 年 3 月末時点で、当院透析患者数は 51 人（昨年 49）、内 38 人（昨年 44）は外来透析、13 人（昨年 5）は入院中あった。

2021 年度の延べ患者数は 7557 人（昨年 7738）で、外来 6215 人（昨年 6430）、入院 1342 人（昨年 1308）で、2020 年度に比べて外来 215 人減（昨年 270）、入院患者 34 人増（昨年 135）で、延べ人数としては 181 人減少（昨年 135 人減少）で、2020 年度に続いての減少であった（図）。

入院患者の入院科は同一患者再入院も含め、

腎臓内科 39 人（紹介元：当院外来 24、新規導入 2、三光クリニック 2、福岡大学病院 5：腎臓・膠原病内科 1；形成外科 1；整形外科 1；心臓血管外科 1；呼吸器内科 1、松口胃腸科外科クリニック 1、よしとみ内科 1、白十字病院 1、賀茂クリニック 1、福岡山王病院 1、みやうち内科循環器内科 1）。

循環器内科 9 人（紹介元：福岡大学病院心臓血管外科 2、福岡大学循環器内科 1、三光クリニック 1、九州医療センター 1、むらやま泌尿器科クリニック 1、松口胃腸科外科医院 1、福岡和仁会病院 1）。

糖尿病・内分泌内科 7 人（紹介元：新規導入 2、信愛クリニック 2、福岡大学病院糖尿病・内分泌内科 1、福岡大学循環器内科 1、よしとみ内科 1）。

眼科 6 人（紹介元：当院 3、本村内科 1、賀茂クリニック 1、信愛クリニック 1、三光クリニック 1）。

消化器内科 2 人（紹介元：重松クリニック 1、賀茂クリニック 1）。

ECUM1 人。臨時透析 1（大阪より帰省のため）。

2020 年度の死亡患者は 9（昨年 9）人で、全員入院後：他院よりの紹介患者 4 人、当院外来患者 5 人（2 名は長期の人工呼吸器管理状態：肝硬変、肺炎）、肺癌 1、肺炎 1）。

新型コロナ感染は 3 名、1 名は入院中患者で同室者より感染し、福岡大学病院コロナ病床へ転院。その後、当院へ再度転院後に暫くして自宅退院し、外来透析再開。2 名は、外来患者で、空間的・時間的隔離透析を外来で施行し治癒。通常外来透析へ戻る。スタッフ感染は 1 名で、家族より感染。

血漿交換は、腹水濃縮再静注（CART）：延べ 14 回（昨年 8）、同一患者あり。免疫吸着（神経疾患：延べ 10 回＜昨年 18＞）：同一患者で入院加療。

シャント関連：新規作製 11 人（昨年 15）、PTA 8 人（昨年 13）：同一患者あり、であった。

紹介元病院は、福岡大学病院腎臓・膠原病内科・循環器内科・心臓血管外科・形成外科・整形外科、白十字病院、三光クリニック、重松クリニック、信愛クリニック、三愛クリニック、山口胃腸科外科クリニック、本村内科、賀茂クリニック、よしみ内科、みやうち内科循環器科、伊都クリニック（順不同）であった。

（村田 敏晃）

眼科・アイセンター

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

副院長・アイセンター長	野下 純世
部長	ファン ジェーン
医師	下川 亜沙美
看護師	2名（外来日は応援あり）
視能訓練士	3名
眼科クラーク	1名
医師事務	1名（外来日は2名）

2. 臨床実績

2021年度 眼科手術症例内訳

	外来	入院	合計
水晶体再建術（白内障手術）	25	566	591
硝子体手術	1	66	67
網膜復位術	0	2	2
緑内障手術	2	25	27
外眼部手術	26	18	44
硝子体注射（※1）	262	9	271
その他	146	55	201
計			1,203

硝子体注射（※1）	外来	入院
テノン氏嚢内注射	8	0
硝子体内注射	258	9

3. 1年間の活動と今後の展望

【臨床実績と1年間の活動】

この1年もコロナ禍が続き、コロナ患者が増加すると、緊急性のない手術を減らすという対応を行いながらの1年間でした。ただこれまでの感染対策が功を奏し、前年に比べますと、予定手術を変更することも減り、入院前のPCR検査も導入したため、患者様にも安全に手術を受けていただけるようになりました。手術につきましては、前年と同様、硝子体手術、白内障手術、各種緑内障手術、外眼部の手術（眼瞼下垂、睫毛内反）、結膜弛緩症と多種多様な治療に対応しました。コロナ禍による受診控えがあるなか、慢性疾患である緑内障や糖尿病網膜症の患者様が、受診中断しているケースも増えてきており、久しぶりに受診されたら、かなり悪化していたということもありました。感染対策には万全を期しておりますので、必要な定期検査は受けていただくよう、患者様にも説明させていただいております。

また外来は、火、木（午前、午後）、土（午前）、手術は月、水、金（午前、午後）で行っ

ております。火、木、土の外来は、待ち時間軽減のため予約制で行っており、看護師や視能訓練士、医師事務の配置を手厚くすることで、患者様の待ち時間短縮を図り、患者満足度の向上を目指しております。外来日は、もちろん予約外でも診察は可能なのですが、予約の患者様が多い中、お待たせしてしまったという事例も起こっておりますので、初診の患者様でも、ご遠慮なく予約のお電話を頂けますと、空いている時間をご案内できますので、よろしくお願い申し上げます。

(野下 純世)

健康管理センター

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

健康管理センター長 横山 昌典
事務職員 1名

2. 臨床実績

2021年度健診実績	
企業検診	945件
協会けんぽ健診	658件
特定健診	382件
人間ドック	19件
合計	2,004件

その他、福岡市がん検診として、胃がん検診19件、大腸がん検診42件、前立腺がん検診20件がありました。また、肝炎ウイルス検診は1件施行されました。

3. 1年間の活動と今後の展望

健康管理センターは、医師1名と事務職員1名を中心に健診部門の運営を担当しています。健診運営会議を月1回開催し、円滑な体制作りを努めています。また、衛生委員会も併設されており、当院職員の健康管理を行っています。

健診専属医師がいないため、健診患者数を大きく増加させる事は不可能な状態ですが、コロナ渦で健診受診者数が減少しているという社会現象の中、当センターでは若干の増加が見られました。新規の依頼にも可能な限り対応しています。

当院では、健診部門と一般診療部門が混在しているため、健診受診者に御迷惑をおかけしているのが現状です。しかし、異常が見られた時に早急かつ円滑に2次精査・治療を行える事が可能であり、メリットでもあると考えています。受診者に、わかり易く、有意義な健診となる事を目標にしています。

（横山 昌典）

薬剤科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

薬剤師 7名（パート1名含む）
クラーク 2名

2. 臨床実績

抗がん剤無菌調製業務	357件/年
薬剤管理指導件数	640件/年（外来指導も含む）

3. 1年間の活動と今後の展望

2021年度の調剤処方箋枚数は月平均約1700枚、注射処方箋は月平均約2700枚でした。入院患者さんの鑑別件数は、月平均約170件、年間2050件でした。薬剤科ではできる限り患者さんの持参薬を使用することで、患者様の自己負担の軽減や医療費の削減に貢献することができました。

薬剤科が主体となる委員会においては、薬事審議会を通して、採用薬の期限切れの情報を医師に周知し、できるだけ廃棄薬剤とならないよう情報共有を行い、デットストック薬剤の削減にも取り組みました。

後発医薬品の取り組みにおいては、約50品目の薬剤を後発品へ変更し、8月より後発医薬品調剤体制加算Ⅰを算定、その結果、在庫金額も大幅に削減することができました。しかし、製薬会社の医薬品の納入規制もあり在庫管理については頭を悩ます日々が多くありました。（2021年6月時点：後発医薬品の割合87%）さらに、定期処方の全病棟導入、調剤方法（持参薬も含めた）の統一を行った事で、配薬確認を行う看護師への業務負担軽減にも繋がることができました。薬剤科も大幅な業務内容の見直しを行った結果、残業時間の軽減や他の業務拡大へとシフトすることができました。その中でも一般病棟への入院サポート介入を継続的に行う事ができ、入院時に患者さんがどんなお薬を今まで服用していたのか、重複したお薬はないか、医師・看護師と情報共有を行い、その後も継続した服薬指導やカンファレンスへの参加、自宅退院される患者さんへの退院指導にも介入できる取組を行ってきました。その結果、薬剤管理指導件数も昨年と比べ大幅に増加することができました。また、認知症ケアラウンド、心リハ回診にも積極的に参加し、チーム医療にも少しずつ貢献することができました。

次年度は、今年度確立してきた業務を継続的に行い、チーム医療へ貢献できるようようスタッフ全員で取り組んでいきたいと考えています。

（貝田 裕彰）

臨床工学科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

臨床工学技士 5名

2. 臨床実績

医療機器管理台数	132台		
定期点検件数	508件	日常点検件数	14,328件

3. 1年間の活動と今後の展望

【血液浄化療法業務】

血液浄化療法センターには多人数用透析装置23台、個人用透析装置6台があり、月平均55名の患者様の治療を行っています。透析通信システムや排水除害装置を含む透析に関連する全ての装置の保守管理に臨床工学技士(CE)は携わっています。特に透析用監視装置については、全CEがメンテナンス講習を受講し、洗浄・消毒・点検・部品交換・調整に至るまで全てを当科で行っています。それらを通して、日頃より技術の定着と向上に取り組み、90%以上のトラブルを科内で対処し、治療中の装置トラブル防止にも寄与しています。コロナ禍であったために現地参加は出来ませんでしたが、日々の業務からの学びを第66回日本透析医学会学術集会にてポスター発表しました。

また多様な病態やニーズに対応するため、特殊血液浄化療法にも積極的に取り組み、2021年度は腹水濾過濃縮再静注法14例、血漿吸着療法10例を施行しました。その他、LDL吸着や持続血液透析濾過にも対応することができます。

今年度は、COVID-19患者さんの透析治療にも対応しました。他患と交わることのないように陰圧テントを用いた空間隔離と時間的隔離を行い、感染を広げることなく治療を継続させることが出来ました。COVID-19は透析医材の供給にも影響が出ましたが、対応を余儀なくされましたが、スタッフやメーカーの協力があり、治療に支障をきたすことなく業務を維持できたことは良い経験となりました。

今後も様々な危機に対応できるようにBCP策定を行い、患者さんの治療を継続できるように取り組んでいきたいと考えています。

【医療機器管理業務】

院内で使用する人工呼吸器・シリンジポンプ・輸液ポンプなど100台以上の医療機器を安全に使用するため、中央管理化し保守管理・点検・修理を行っています。また、毎日、病棟・外来の医療機器巡回を行い、適切に使用できているか、不具合はみられないか等を点検しています。

今年度は、COVID-19陽性患者の入院受け入れが始まったため、心電図、酸素飽和度や血圧をモニター管理できるように機器の提案と導入を行いました。

その他、各部署からの医療機器に関する相談、看護師やその他の職種を対象に医療機器研究会なども行っており、2021年度は18件の研修会を実施しました。

今後も、専門分野の知識向上を図り、安全な医療機器の提供に努め、チーム医療の一員として地域医療に貢献出来るよう努力してまいります。

(藤本 菜摘)

臨床検査科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

検体検査部門	臨床検査技師	3名
生理検査部門	臨床検査技師	3名

2. 臨床実績

【検体検査】			【生理検査】		
生化学的検査	生化学	338,179	循環機能検査	心電図	5,395
	その他	2,712		ホルター心電図	175
血液学的検査	血算	20,108		その他	621
	凝固	5,011	呼吸機能検査	肺活量等	149
	HbA1c	6,984	超音波検査	胸腹部	1,158
	その他	9,939		心臓	922
尿・糞便等検査	尿定性	8,838		頸動脈	344
	尿沈査	2,744		下肢血管	50
	便潜血	2,077		甲状腺等	100
	その他	1,465	脳波検査等	脳波	33
免疫学的検査	CRP	10,396		PSG検査	27
	感染免疫	6,945	神経・筋検査	誘発筋電図	54
	血液型	142		筋電図	2
	不規則抗体	231	その他		2,069
	クロスマッチ	400			
その他		70			

<新規購入装置>

POCT用遺伝子検査装置(ID NOW™)
超音波診断装置(ARIETTA 65LE)

3. 1年間の活動と今後の展望

コロナ禍で様々な対応が迫れる中、前年度末に新規導入した新型コロナウイルス感染症に対する2種類の検査機器を4月より稼働させ、感染対策に対する検査体制を確立する事が出来ました。

中でも、病棟でのクラスター発生時や全国的な検査件数の急増等で試薬や検査材料が供給不足となった時にも、各メーカーの協力を得ながら状況に応じた検査体制が維持できた事は、コロナ禍において臨床検査科としても大きな進歩でした。

此れからはPOST コロナに向け、より短時間で新型コロナウイルス検査が行える検査機器を追加導入し、更なる検査体制の充実を図って行きたいと考えています。

その他にも、主にポータブル用としての超音波診断装置を更新し、画像診断の質の向上にも

取り組んで参ります。

今後も、感染対策を継続しつつ新型コロナウイルス関連検査だけでなく、他の検査項目においても「正確かつ迅速な検査結果報告」をモットーに、医療を通じて地域社会へ貢献できるよう日々精進して参ります。

(小野 一充)

栄養管理科

1. スタッフ紹介 (2022年3月31日現在)

管理栄養士 3名 栄養士 1名
 (委託) 管理栄養士 2名 栄養士 3名 調理師 3名
 (委託パート) 管理栄養士 2名(実働 5H) 仕込み 4名(実働 5H)
 朝昼洗浄 5名(実働 5.5H) 夕洗浄 3名(実働 3H)
 調理補助 5名(実働 7.75H、5.75H、4H)



お盆の日の献立

2. 臨床実績

月	食事指導 件数		糖尿病教室 実施状況		栄養管理 計画書 作成件数
	入院 件数	外来 件数	実施 回数	延べ 人数	
4	20	24	17	41	335
5	6	18	13	14	267
6	8	16	18	24	301
7	19	20	16	64	304
8	5	25	6	6	282
9	4	19	0	0	248
10	7	14	15	23	294
11	7	21	13	19	318
12	13	20	9	37	330
1	7	22	8	16	292
2	9	14	16	21	283
3	8	11	16	18	329

一般食	食数	特別食	食数
常食	72.4	エネコン食	97.6
軟飯軟菜食	28.5	術後6回食	0
全粥食	18.3	易消化食	0.1
3・5・7分粥食	3.0	低プリン食	0
流動食	1.8	低残渣食	4.4
嚥下訓練食	46.7	脂質制限食	1.8
かりん食	22.8	蛋白制限食	19.2
オーダー食	1.8		
延食	1.4		
ヨード制限食	0		
術前補水食	0		
短期ドック食	0		
濃厚流動食	25.7		
一般食小計	222.4	特別食小計	123.2

令和3年度

1日平均食出数合計 345.5食

3. 1年間の活動と今後の展望

コロナ2年目を迎え、以前にも増して感染対策を徹底しながら業務を遂行いたしました。クラスター発生時は、委託業者とも協議しながら対応し、安全なお食事の提供に努めました。今後も様々な状況に対応できるよう、感染防止を念頭に先ずはしっかりと自己管理を行っていきたいと思います。

入院された時にお一人ずつ食事説明をすることで、アレルギーの有無や嗜好を聞き取り、正確な情報を収集して厨房と共有しています。低栄養の患者さんは、病棟での栄養カンファレンスやSTとの摂食嚥下カンファレンス時に、食種や食形態・栄養補助食品などの提案を適時対応しています。コロナ渦でNST回診は控えていますが、患者さんの栄養状態を十分に把握し敏速に支援して参ります。

また、「栄養情報提供書」を用いて食事情報を発信し、多職種と連携を図り、この環境の変化の中で、心と体が少しでも健やかになれるお手伝いを実践していきたいと思います。

(田代 由美)

リハビリテーション科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

理学療法士（PT）	28名
作業療法士（OT）	13名
言語聴覚士（ST）	5名
ケアスタッフ（CS）	5名

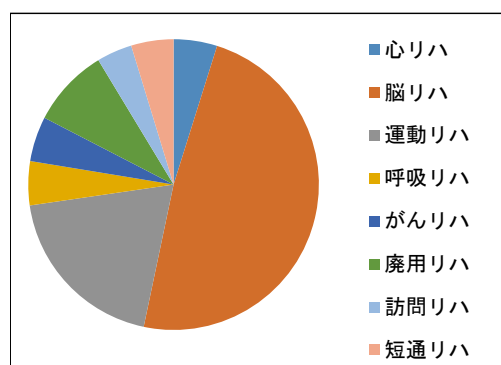
2. 臨床実績

リハビリテーション（以下リハビリ）科の診療内容は、医療保険での各疾患別リハビリと介護保険の訪問リハビリ、短時間通所リハビリを実施しています。

2021年度の各リハビリの実施件数は、別表（表1、図1）の通りとなっています。

（表1）リハビリテーション実施件数

リハビリテーション種別	単位数	件数
心大血管リハビリテーション	6202	単位
脳血管リハビリテーション	62108	単位
運動器リハビリテーション	24845	単位
呼吸器リハビリテーション	6278	単位
がん患者リハビリテーション	6409	単位
廃用症候群リハビリテーション	11210	単位
訪問リハビリテーション	5071	件
短時間通所リハビリテーション	6028	件



（図1）各リハビリテーション実施割合

3. 1年間の活動と今後の展望

リハビリ科は、2021年度の目標を「リハビリ部門の充実」、「働きやすい職場環境作り」、「地域ニーズにこたえるリハビリ体制の整備」、「リハビリ部門の質の向上」とし、取り組みました。

「リハビリ部門の充実」は、入院支援という形で外来患者様や介護保険リハビリ利用者様の状態変化を早期に察知し、入院加療を勧められるよう、各担当チームの情報共有を図りました。対象者を察知した場合は、院内ベッドコントロール会議で紹介を行うようにし、2021年度は、9名の紹介を行っております。また、外来予約枠の運用を9月より開始しました。この取り組みは、外来患者様のご理解とご協力により、待ち時間短縮と外来患者様増加につながりました。（表2）。

（表2）外来リハビリテーション利用患者様延べ人数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2020年	844	819	1131	1287	1123	1234	1393	1258	1341	1148	1280	1470
2021年	1577	1286	1589	1523	1355	1421	1735	1739	1637	1497	1448	1706

「働きやすい職場環境作り」は、前年度より引き続き、各担当チームの成果報告会を行い、スタッフのモチベーション向上を図りました。年々各チームの取り組みの質が向上しており、「病棟と看護研究を協働した患者様の自立度表の作成（図2）」、「入院患者様、訪問リハビリ利用者様のアウトカムの確立」、「筋萎縮性側索硬化症患者様の外来カンファレンスの立ち上げ」、「入院患者様の集団



（図2）ベッドサイドに貼付する患者様自立度表

的介入、短時間通所利用者様の学習療法推進による認知機能低下予防」「VF 件数増加に連動した摂食嚥下機能療法の質向上による肺炎再発患者様の減少」と、最初に紹介した「リハビリテーション部門の充実」にもつながる成果が出ています。

「地域ニーズにこたえるリハビリテーション態勢の整備」は、壱岐南公民館での介護予防教室を開催しました。内容は、地域高齢者を対象に全6回で健康指導講義、エクササイズを実施しております。

「リハビリ部門の質の向上」については、リハビリスタッフのベースアップを目標にベースアップ研修会を実施し、呼吸介助技術の習得・向上を図りました。また、コロナ禍でオンラインでの参加ですが、神経難病ネットワーク学会とパーキンソン病・運動障害疾患コンgresに計4題の演題登録を行い、様々な知見を得ました。

2022年度も引き続き、病院目標、リハビリ科目標に合致した各チームの取り組みを推進し、提供するリハビリサービスの質の向上に励んでいきたいと考えております。また、3

月より運用開始した重心動揺計検査（図3）を活用し、患者様・利用者様の転倒予防やバランス向上のためのプログラム立案に繋げていきたいと考えております。



（図3）重心動揺計検査

患者様の重心の位置やバランス能力を数値化して、リハビリの効果判定など、症状の経過を可視化することができます。

（山口 良樹）

放射線科

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

放射線技師 4名 クラーク 1名

2. 臨床実績

2021年度業務実績

() 内は前年度件数

一般撮影	8349件 (9125)
骨密度測定	306件 (339)
CT撮影	2708件 (2955)
MRI撮影	997件 (931)
透視検査	603件 (607)

時間外対応

コール回数	114回 (97)
撮影件数	220件 (176)

2021年度 主な放射線関連機器

一般撮影装置
ポータブル撮影装置
移動式外科用イメージ装置
X線デジタル透視装置 (DSA)
全身用骨密度測定装置
マルチスライスCT (64列)
オープンMRI (0.4T)
CR読取装置
PACS (院内画像配信システム)
遠隔読影システム

3. 1年間の活動と今後の展望

今年度は流行する新型コロナウイルスの診断に対応すべく、9月にCT装置を更新しました。これにより高速撮影が可能となり、短時間の息止めで高精細な画像データが収集できるようになりました。

近年、日本では放射線検査の増加により医療被曝が問題となっておりますが、当院も医療放射線安全管理部会を発足し被曝線量について定期的に見直しを行い管理しています。また、職員に対しても被曝に対する知識向上のための研修を開催しておりますので、どうぞ安心して検査を受けられて下さい。

年々、高度医療機器による画像診断は進歩を遂げ多様化しており、これら複雑で膨大な画像データは遠隔読影システムを通して放射線科医による読影を行い、主治医とのダブルチェック体制をとっています。

私達はこれに対し充実した画像を提供できるよう医師との定期的な画像カンファレンスを行い、日々知識の向上と技術の習得に努めています。

また24時間オンコール体制をとり時間外での救急医療も対応しています。

今後も徹底した感染対策を継続し、地域の方々・近隣の医療機関の皆様へ安心と満足のできる医療を提供していきたいと思っております。

これからも思いやりをもって患者様に接するよう業務を実践し、少しでも地域医療に貢献できれば幸いです。

(久間 伸彦)

看護部

看護部の目標に沿って活動を行いました。

1. 看護の質の向上

医療安全管理体制の充実に努める為に、指さし呼称の徹底、転倒転落レベル2、3aの件数の減少、同様のヒヤリハットを起こさないことを目標にかかげました。ヒヤリハット333件と前年度より増加した結果となりました。

コロナ禍において感染対策の徹底に努めましたが、9月に4階病棟でのクラスターを発生させてしまいました。徘徊認知症患者へのマスクの装着が困難で、全スタッフN95マスク装着にて対策をたて手洗いと消毒、換気の徹底を再度周知徹底させました。全スタッフの協力のおかげで1カ月弱で終息することができました。

看護職員の資質の向上に対しては、院外研修の参加は94名（看護協会研修76名、養成研修9名、看護学会2名、その他7名）、院内研修参加は401名でした。今年度より認知症ケアコース、退院支援コースの追加で興味のある研修に参加でき知識の向上に努めることができました。また、看護研究ではNPO法人 日本看護キャリア開発センターへ講師を依頼し、質的研究のインタビューデータ分析方法を新しく学び取り組んでいます。身体抑制減少に対してはカンファレンスで検討しできるだけ減少するように努めました。

2. 病院の経営基盤の強化

全部署において、効果的効率的な病床管理を行うために各部署年間目標の稼働率達成に向けて取り組みましたが、コロナのクラスター発生に伴い目標稼働率を達成することはできませんでした。

3. 連携機能の促進

チーム医療の推進を目指し、病院機能評価の認定更新の準備を行っています。コロナ陽性患者の受け入れ、クラスター発生、外来発熱患者受け入れ、救急車受け入れ等、コロナ禍における体制においては、看護師だけでなく他部署と協力し連携を図ることで乗り切ることができました。

4. 働きやすく、コミュニケーションの良好な職場づくり

5月からコロナ陽性患者の受け入れを開始するために、対応する看護師の面談や各部署からの応援体制で少ない人数での部署対応で心身の疲労は大きい1年でした。時間外勤務は前年度より減少した部署と増大した部署とがあり業務改善の必要性を感じました。

年間を通じてリフレッシュ休暇など計画的な有給休暇の取得に努めてきましたが、部署により差が出ているのが今後の課題だと思います。

今年度は新型コロナウイルス陽性患者の受け入れ、時間外発熱患者の救急車受け入れ等積極的にコロナウイルスへの対応に取り組みました。クラスター発生にはなりませんが、感

染症看護や緊急事態での対応など学ぶことが多い一年となりました。

ウイズコロナの時代に、できるだけ通常の業務に戻せるように業務調整し安全で質の高い看護を提供できるように努力し、働きやすい環境を整えていきたいと思ひます。

(江口 敦美)

2 階北病棟

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

看護師	18名	准看護師	2名	ケアスタッフ	4名
クラーク	1名	MSW	1名（専任）		

2. 臨床実績

延べ入院患者数	805.9名
病床稼働率	88.4%
新入棟患者数（転入数）	35.4名
新退棟患者数（転出数）	35.4名

3. 1年間の活動と今後の展望

当病棟はパーキンソン病（PD）をはじめ、多系統萎縮症（MSA）多発性硬化症（MS）脊髄小脳変性症（SCD）大脳皮質基底核変性症（CBD）筋萎縮性側索硬化症（ALS）等の神経難病の患者さんや疾患が進行して身体的障害のある患者さんを対象とした『障害者施設等一般病棟』です。神経難病は原因・治療法が確立していない疾患で、症状も様々でしかも進行するのでADL（日常生活動作）が低下し、歩けなくなったり嚥下（飲み込み）機能の低下で経口からの食事が摂れなくなったり、話す事ができなくなったりと日常生活に支障をきたします。私達は患者さんが出来るだけ在宅生活が継続できるように、ご家族の介護負担軽減を目的としたレスパイト入院を推進しています。現在50名前後の方がレスパイト入院を利用し在宅生活を継続されています。介護負担だけでなく、定期的もしくは不定期に集中したリハビリを行う為に入院され病状の評価、薬剤調整を行い、疾患の進行を緩やかにできるメリットもあります。

在宅支援では当院の訪問診療・訪問看護、また他事業所の居宅介護支援センターや訪問看護・介護ステーションとの連携も重要で継続した看護や在宅でも行えるよう情報交換やカンファレンスを積極的に開催し見える看護にも努力しています。医師・看護師・リハビリスタッフ・MSWを軸にして薬剤師・栄養士など多職種で定期的にカンファレンスを開催し情報を共有し、ひとりひとりに適切な医療の提供ができるようチーム医療を実践しています。

2021年度の病棟目標では看護の質の向上として医療安全管理を行的確な看護を提供することを掲げ、指差し呼称の徹底、0レベルを増やすこと、転倒転落対策に取り組みました。全体のヒヤリハットは101件（転倒以外、1レベル39件2レベル19件3aレベル4件）であり、転倒転落は41件、ヒヤリハットは確認不足で起こっており、2人連続型でのダブルチェックを徹底し、件数を減少しています。0レベルはなかなか意識づけが大変ですがスタッフ全員で声かけながら0レベルの件数を増やす努力をしています。当病棟の患者さんは疾患の進行により転倒を繰り返す方が多く、触れるとナースコールと連動するセンサーマットやヒモのクリップが外れるとナースコールと連動するウーゴ君などを利用して転倒・転落を防止して全体55件のうち、レベル2は5件で60%減少、レベル3aは2件で67%減少の結果を出しています。同じ患者さんが何度も転倒を繰り返すことが多く、センサーマット・ウーゴ君を利用している、PD特有のバランス障害や認知面の問題で年々対応は困難になっています。

コロナ禍での感染対策は必須になり、リンクナースを中心にフェイスガード・ゴーグルを徹底し、N95 マスク着用、物品に対してもコスト面を考慮しながら対策徹底しています。福岡市からの要請もあり、C病棟を立ち上げ各病棟より看護師を派遣する形で現在も継続している状況です。スタッフ一丸となりクラスターを起こさないように注意して働いています。コロナの終息も見えない状況で感染対策を考慮しながら看護学生の受け入れ、施設スタッフの吸引・注入指導などを行っています。今後も学生を受け入れたりするのでそれぞれ統一された看護指導の提供を行う為にもスキルアップに努めていきたいと思えます。

(下谷 美樹)

2 階南病棟

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

看護師	17名	准看護師	1名	介護福祉士	1名
ケアスタッフ	2名	キーパー	1名	リハビリセラピスト	1名
クラーク	1名				

2. 臨床実績

一般病床稼働率	67.8%	延入院患者総数	2,721名
包括ケア病床稼働率	81.0%	延入院患者総数	7,970名

3. 1年間の活動と今後の展望

2階南病棟は、一般病床と地域包括ケア病床の混合病棟です。眼科と糖尿病を主に、内科、緩和ケア、整形外科の患者さんが入院されています。2020年から世界的に流行し続けている covid-19の影響を受け、2021年は当病棟でも通常診療の一時的な縮小を余儀なくされました。幸いクラスターの発生は抑えられましたが、患者さんには入院計画の変更など御迷惑をおかけ致しましたこと心苦しく思っております。

2021年度の病棟の取り組みとしては、感染予防対策下の2年目を迎えた面会制限の中で、患者さんと御家族との時間をいかに作るかということに重点を置きました。ベッド上生活の患者さんも面談室で御家族と直接会って会話ができるように、通常業務の中に面会対応を取り入れ家族時間の環境を整えました。また、オンライン面会も積極的に受け入れ、遠方の御家族でも患者さんの顔を見て会話を交わせるように努めました。2年目の感染予防対策下では、病棟スタッフから患者さんと御家族の時間に配慮をする声が自主的に聞こえ、意識変革が起こっています。医療を必要としている患者さんにとって、人との接触や距離が求められる日々が続いていることは、闘病への精神的な支えである家族の力が十分に得られない状況です。また、御家族の患者さんを思が故の不安や心配など、もどかしい気持ちも理解しております。これからも私達は、患者さんと御家族の気持ちの橋渡し役として、共に医療に臨み、寄り添う看護に努めてまいります。

（犬束 由起子）

3 階病棟

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

看護師	16名	准看護師	2名	介護福祉士	1名
ケアスタッフ	4名	キーパー	3名	クラーク	1名

2. 臨床実績

平均在院日数： 32.5日

居住系介護施設も含めた在宅復帰率： 82.64%

病床稼働率： 83.8%

3. 1年間の活動と今後の展望

3F病棟は急性期治療を終了し、すぐに在宅生活に移行するには不安のある患者さんに対して在宅支援する病棟です。内科、整形外科など様々な疾患の患者さんに対応しています。60日間という限られた入院日数の中で患者さんとご家族が希望される療養先へ退院できるように多職種で支援しています。2021年度は退院先でのコロナ陽性者の発生などで退院が延期となるケースも多く退院調整が難しい1年でした。その中で、オンラインでの施設アセスメントの実施、施設職員と患者さんのオンライン面談を数例実施しました。この状況は継続することが予想されるため情報共有手段の検討はコロナ禍での課題と考えています。

看護研究ではユマニチュードの学習効果を調査しています。認知症を有する患者さんは多い現状で認知症ケアチームの介入や院内デイケアを利用していますが、面会制限などで家族との関りが少ない現状もあり症状の進行を認める場合もあります。対応で苦慮することも多いためユマニチュードを取り入れた関わりについてスタッフの学習効果を見出すことができればと期待しています。

今後の展望としては、介護福祉士の夜勤を開始しています。病院経験なく入職したスタッフもいるため業務内容も含め今後の検討が必要ですが人数が増え介護福祉士の夜勤が定着することが今後の課題です。

（廣畑 直子）

4 階病棟

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

看護師	20名	准看護師	1名	介護福祉士	2名
ケアスタッフ	1名	病棟クラーク	1名		

2. 臨床実績（2021年度）

入院件数	: 564名
退院件数	: 330名
転棟件数	: 263名（地域包括ケア病棟+緩和ケア病棟）
病床稼働率	: 80.2%
・循環器心臓リハビリ件数	: 63例、
・ペースメーカー植え込み術・ジェネレーター交換術	: 24例
・化学療法件数	: 22例（悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、骨髄異形成症候群、ATL、白血病など）

3. 1年間の活動と今後の展望

4F病棟は内科を主とした急性期治療を行う一般病棟です。なかには終末期の看護、化学療法を繰り返す血液疾患の看護など多様な疾患患者の対応を行っています。急性期治療が1~2週間内で行われた後、病状が安定しリハビリ期へ移行するタイミングで、地域包括ケア病棟への調整を行っています。

コロナ禍において、病棟では1年以上感染対策に努めて日々看護を行っていましたが、2021年度当病棟でのクラスターを発生する事態に落ちました。この経験したことない事態をどう乗り越えるか病院全体で協力体制を整えていただき、長期化することなく終息することが出来ました。この経験を得て、コロナ感染対策にも自信が付き、どんな環境でもPPEの重要性を確信できたことは大きな糧となりました。

今後は、急性期治療を行う入れ替わりが激しい病棟である為、入院時の徹底したコロナ検査と入院中の患者の状態変化に早い段階で気付き対応して行くことが課題だと感じています。

院内TQM活動では、「タイムハンター業務内容の見直しと改善」に取り組み、申し送り短縮を図り患者さんの所に早くケアに行ける取り組みを行いました。急性期ということで患者の変化が大きいことから、結果的に申し送り時間短縮までには至らなかったのですが、申し送りシートを作成しスタッフ一人一人の意識づけができ、申し送りツール、ホワイトボード変更することで業務の整理が図れることが出来ました。

電子カルテ導入され数年が経ち、新たな方法で申し送り短縮の取り組みを再検討する事は引き続き課題です。

今後の展望としては、2022年度より循環器Drが2人体制と増えることにより、循環器患者の増加を目指し、また心不全教育入院の開始にむけて、包括病棟と連携し取り組んでいきたいと考えています。

(河野 真紀)

緩和ケア病棟

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

医師 3名

非常勤 精神科医 1名（2回/月） 非常勤 口腔外科医 1名（1回/週）

非常勤 臨床心理士 1名（1回/週） 看護師 22名 介護福祉士 1名

ケアスタッフ 3名 クラーク 1名 ボランティア登録 30名

2. 臨床実績

2021年度延べ患者数 累計 5,711名

新入棟患者数 208名

新退棟患者数 192名

平均在院日数 29.3日

病床稼働率 78.3%（20床中4床コロナ病床として使用期間 6ヶ月）

在宅復帰数 42名（在宅移行率平均 21.1%）

3. 1年間の活動と今後の展望

緩和ケア病棟は、がんを患い残念ですが、その治療を続ける事が出来ないと判断された患者さん、ご家族に対して身体的、精神的、社会的さまざまな苦痛を和らげる事が出来るように生活上のサポートをさせていただく病棟です。上記の様に様々な職種で協働し患者さん、ご家族にとって何が最善なのかを考え希望に沿えるように支援を行います。

コロナ禍で緩和ケア病棟でも従来のような自由な面会、外出や外泊を行う事が出来ないという制限が課せられて3年目となりました。当初は未曾有のウイルスに困惑することばかりでしたが、医療者として自分自身の健康管理はもちろん、患者さん、ご家族の感染対策に対する指導的役割も含めスタッフ一同精進しています。また、今年度は緩和ケア病棟20床の内4床をコロナ病床としました。感染者対応チームの発足と緩和ケア病棟スタッフが協力し合い感染者のケアに関わる事に対して、病棟業務や体制を見直しました。緩和ケア病棟入院中の患者さん、ご家族に十分な関わりが出来ないというジレンマを抱えるスタッフも多かったと思いますが、同じ病を抱えた患者さんに対して同じように心を込めたケアの提供を行う事が出来ていると思います。

今後も外来から入院、退院され在宅療養中の患者さん、ご家族のエンドオブライフケアに最善を尽くすことが出来るようにスタッフ全員が共通認識を持つことができる連携体制の構築と退院調整看護師育成の継続を課題と考えています。そして、下記の看護研究で貴重なご家族の意見を頂きました。この意見を元に私たちが生かすべきことを考え、コロナ禍でのグリーフケアのあり方を考えていきたいと思っています。

4. 業績

2021年度より質的看護研究 現在進行中

（高田 真弓）

中央材料室 手術室

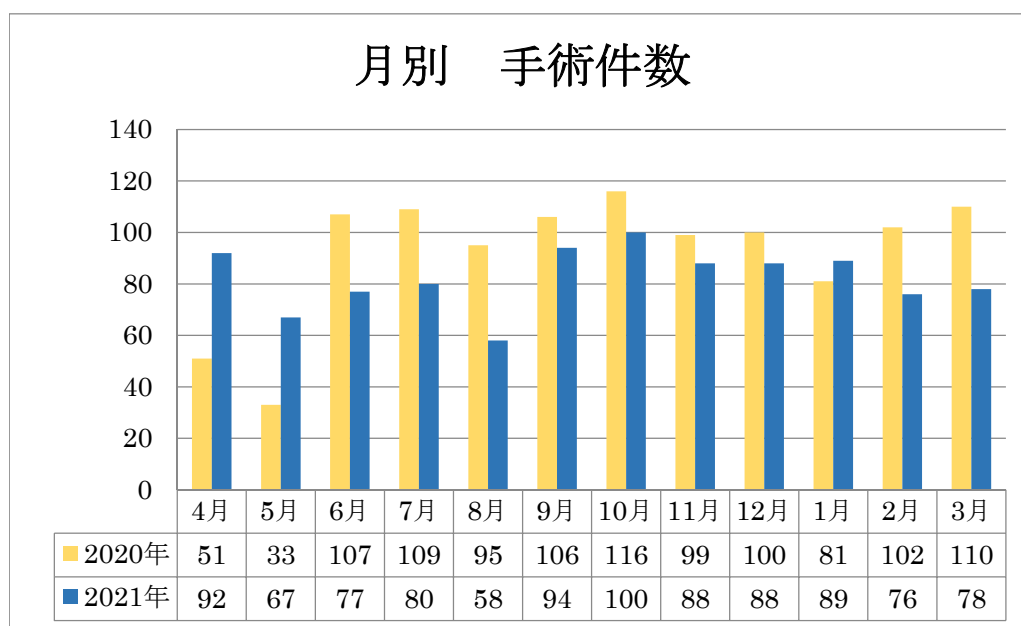
1. スタッフ紹介 (2022年3月31日現在)

看護師 7名
 准看護師 1名
 キーパー 1名 (パート)

2. 臨床実績

手術症例数：962例

(内訳：眼科 927例 整形外科 0例 循環器内科 24例 腎臓内科 11例)



3. 1年間の活動と今後の展望

<手術室>

総手術件数は、2019年度 1357件、2020年度 1109件、2021年度 962件と下降の一途を辿っています。原因として、COVID-19の影響から不急な手術の延期などが考えられます。しかし、いつでも手術件数増加に対応できるよう、業務改善への取り組み、研修会や学会へ積極的に参加し最新の情報を入手出来るよう日々研鑽に励んでいます。また、長期戦の様相を呈しつつある COVID-19 に対しては、感染対策の見直しをはじめ、手術受け入れ体制の手順作成や入室から退室までのシミュレーションを行い、COVID-19 患者さんの手術受け入れ体制を整えていきました。

当手術室は、「患者さんが安心して手術が受けられるよう「安全第一」に周術期看護の実践を行う」を看護目標とし、従来通り全患者さんへの術前・術後訪問を継続するとともに、眼科の術前外来(手術が決定した時点で手術室看護師による手術オリエンテーション)の実績を高め、周術期の身体的・精神的ケアに努めていきました。また、麻酔科医が非常勤であるため、麻酔科医の勤務時に術前外来で得た情報を提供し、事前準備を行う事で安全な麻酔看護が出来るよう鋭意努力しています。

<中央材料室>

2020年度は、COVID-19の影響でPPE物品やその他の材料の供給が滞り、物品の確保に奮闘していました。しかし、2021年度は、業者との情報交換を密に行いながら備蓄の確保を維持し、大量の物品使用時にも対応できる体制を確立することで、病院全体の円滑・効果的な医療の提供に繋げることが出来ました。また、業者による定期的な滅菌機器の点検やスタッフの適切な滅菌方法や取り扱い技術で、リコールを発生させることなく滅菌の品質を維持することも出来ました。

<今後の展望>

眼科術前外来時に入院支援を取り入れ、入院前から患者さんの情報を手術室・外来・病棟で早期共有できる体制を確立していき、患者さんが安心して手術が受けられるように関わって行きたいです。また、病院全体の物品の大半を取り扱っている中央材料室だからこそ出来る物品の使用量の把握やコスト削減を強化し、病院経営に寄与していきたいと思っています。

(坂田 夢乃)

外 来

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

看護師	18名
看護師（パート）	4名
准看護師（パート）	1名
眼科視能訓練士	2名
クラーク	5名

2. 臨床実績

各診療科参照

3. 1年間の活動と今後の展望

1) COVID-19の診療体制強化

遷延するコロナ禍において、通常診療を取り戻すべく診療体制の強化を行った。夜間帯の救急搬入、施設からの救急受診において発熱者でもPPEを装着し受け入れができるよう、発熱外来マニュアルを作成。院内で統一した手順で行えるよう体制を整備し夜間の発熱患者の受け入れを再開した。6月には日中しか行えなかった抗原定量検査に加え、夜間看護師でも行えるPCR検査機器（スマートジーン）を導入。操作手順の指導用動画を作成し、看護部全体に操作方法の周知、トレーニングを実施、夜間でも検査が行える体制を整えた。そのため発熱患者の診療体制も充実し、自宅療養者への発症2日後症状確認の電話や、陰性時の精査、入院も感染対策を行いながら安全に実施できるようになった。8月には院内に、コロナ陽性者の受け入れ病床が確保され、コロナチームが招集され外来からも順次チームメンバーの構成に協力を行っている。またワクチン接種に於いては早急にワクチン接種体制を整備し、予約から問診、接種までの運用手順を作成した。院内で手順説明と協力を依頼。事務、医師、コメディカル、看護部が一丸となってワクチン接種を開始できており、現在も継続的に実施できている。

2) 外来看護師の勤務体制を変更

平日、土曜日21時まで日祭日は17時までの勤務体制であったが、日祭日も21時までとし、365日外来看護師が勤務する体制を整えた。また外来患者が来ていない時間帯は、病棟業務に加わり、入院患者の保清や食事介助などケアを行うなど、病棟との連携も深まり協力体制を整えることができた。

3) TQM活動

「前日の予約確認を見直そう」のテーマで、「カチャカチャ業務を見直し隊」が半年間取り組んだ。受診患者平均約100人分の、当日予約内容（診察時間、予定検査、同意書、指示の不備など）の確認を行っており、前日午後より診療の合間に手分けをし、午後の2時間をついやし行っていた作業が、今回の活動により、クラーク1名が0.2時間で行えるようになった。その結果、カンファレンスの充実や、患者にかかわる時間を確保することが出来た。

今後の展望

当院は高齢者や慢性疾患患者が多く、在宅支援を必要な患者も増加しています。地域包括ケアの中心として、介護、福祉、地域と連携、在宅支援のサポートを外来から見据え、院内で情報の共有化と入退院支援の強化を行っています。今後もより適切な医療の提供と患者満足度の向上に努めていきたいと考えています。また予約外の新患患者に対し感染面や問診の効率化などサービス向上に向け改善が必要と考え、次年度の課題とし取り組んでいきたいと考えます。

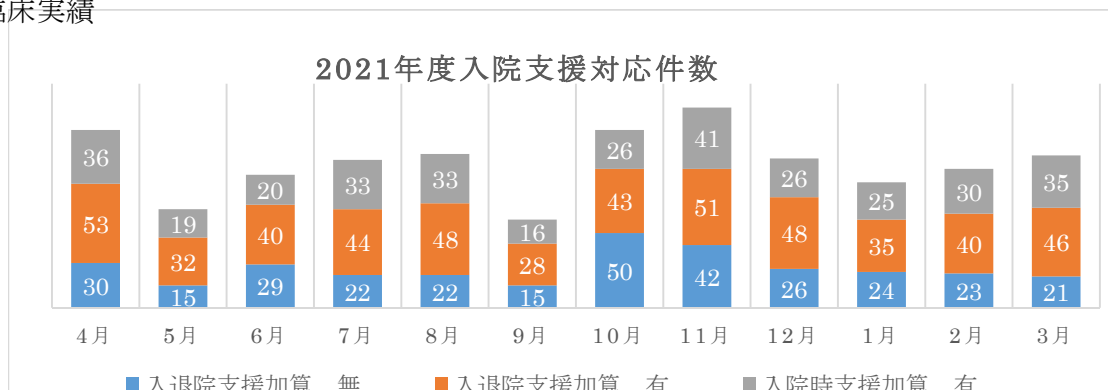
(高田 千寿香)

総合相談室

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

看護師 3名（常勤1名 嘱託1名 パート1名）
事務 2名（嘱託1名 パート1名）

2. 臨床実績



2021年度入院支援対応件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入退院支援加算 無	30	15	29	22	22	15	50	42	26	24	23	21
入退院支援加算 有	53	32	40	44	48	28	43	51	48	35	40	46
入院時支援加算 有	36	19	20	33	33	16	26	41	26	25	30	35
総数	83	47	69	66	70	43	93	93	74	59	63	67

3. 1年間の活動と今後の展望

◇入院サポートセンター

2019年10月より入院サポートセンターを開設し2年5か月が経ちました。

入院支援の実施件数は年々増加しており開設当初は月平均51件であったものが2021年度には月平均70件と大きく伸ばすことが出来ました。一つの要因として、1件の実施に要する時間を計測し、短縮を意識した取り組みを続けてきたことが考えられます。

また、事前の情報収集で聞き取りすべきポイントを絞ったことも効果的であったと思います。来年度10月には外来から入院、そして退院まで一貫したサポートを行う入退院支援センターを立ち上げる予定でプロジェクトチームを結成し準備を進めています。

今後はさらに患者さん個々に焦点を当てた支援を行い効果的な医療や看護を提供でき住み慣れた地域での生活に戻るための手助けができるよう尽力したいと思います。

◇看護相談窓口

看護相談は月により件数の差はありますが月平均5.5件程となっています。

相談の内容としては外来受診相談・介護相談・緩和ケア相談の3つが主で、総合案内でお話を伺った後、必要があると判断した時には専門スタッフにも繋げ問題解決に努めています。相談内容については総合相談室担当看護師内でも情報共有し、継続した関りが持てるようにしています。また、新たにプライバシー保護のため28番ブースの診察室内でも相談を受けることができるような環境を整えました。

（白水 美幸）

訪問看護ステーション かりん

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

訪問看護師 6名（管理者1名含む）
 理学・作業療法士兼任 3名
 医療事務 1名

2. 臨床実績

訪問看護の年次推移

	2019年度	2020年度	2021年度
訪問件数 月平均	464件	429件	382件
※（）は総数	(6462件)	(5152件)	(4579件)
新規契約数	74件	71件 〈内訳〉 医療保険 55件 介護保険 16件	78件 〈内訳〉 医療保険 56件 介護保険 22件
終了者数	31件	67件	59件
看取り数	20件	27件	24件

3. 1年間の活動と今後の展望

2021年度の利用者数は、月平均47名（医療保険33名、介護保険14名）でした。利用者のうち、7割が医療保険、3割が介護保険での利用となっています。医療保険で利用される方が多いのは、病院の特性として悪性腫瘍末期の方や神経難病の方の紹介が多いという事があげられると思います。

利用者様の自宅で最後まで過ごしたい気持ちや、ご家族様の自分たちのできるところまで一緒にいたいという気持ちに添えるよう、紹介や依頼があれば迅速に対応し訪問を開始しています。

自宅に帰られた時の嬉しそうな利用者様、ご家族様の笑顔の中で、看護サービスが出来ることは、仕事で疲れるときもある私たちにとってはモチベーションの向上にもつながります。

「家に帰れてよかった」という気持ちや「訪問看護師が来てくれるので安心」と思われることに訪問看護師の価値があるのではないかと感じています。

今後も、訪問看護を通して、利用者様が、地域の中で安心して暮らせるよう、病院や多職種との連携を図り、継続した質の高い看護の提供に努めてまいります。また、地域社会に貢献できるよう頑張っていきたいと思っております。

（森山 千絵子）

居宅介護支援事業所「かりん」

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）
介護支援専門員 6名 事務 1名

2. 臨床実績

居宅支援件数実績

	2019年度実績	2020年度実績
年間支援件数	2,469件	2,362件
月平均件数	205件	197件

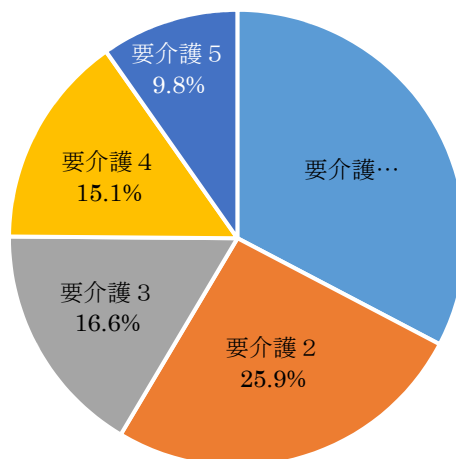
※特定事業所加算Ⅱ算定

※特定事業所医療介護連携加算算定

※2021年度ターミナルケアマネジメント加算算定 9件

要介護度の比率（2022年3月31日現在）

n = 205



3. 1年間の活動と今後の展望

2021年度の居宅支援件数は、2020年度より若干減少となりましたが、コロナ禍でも緩和病棟を中心に各病棟担当のMSWや外来からの支援依頼もあり、緩和ケアや神経難病の利用者さんが比較的多いことが特徴です。地域包括支援センターからの支援依頼も定期的に相談があり、地域における当事業所の信頼と期待も継続して頂いていると感じます。

2021年度も特定事業所加算Ⅱを算定しながら、年間9件のターミナル期の利用者さんの在宅看取りに関わらせていただき、特定事業所医療介護連携加算の継続算定要件を達成することができました。ターミナル期の利用者さんの支援は年々増加傾向にあり、利用者さん、ご家族が人生の最後の時間を少しでも安心して過ごすことができるケアマネジメントを提供できるよう、2022年度も訪問診療の先生方や訪問看護師、ソーシャルワーカー等の多職種との連携を大切にしていきたいと思います。また、要介護3以上の利用者さんも多く担当させていただくことも多くなりましたので、特定事業所加算Ⅰの算定も目指していきたいと思います。

利用者さんは様々な病気や生活背景をお持ちです。加算要件を満たしつつ、幅広いニーズに

対応できるよう、研修会や居宅連絡会への参加はもちろん、週1回のミーティング、毎月1回の業務カンファレンスを行ない、介護支援専門員の資質向上や普段の業務改善を継続していきます。

今後も地域活動への貢献や、他機関・多職種との連携強化にも力を入れ、地域の皆様や関係事業所の皆様から、これまで以上に信頼される事業所を目指し、スタッフ一同努力をしてまいります。

(西島 勝也)

訪問リハビリテーション

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

理学療法士（PT）4名　作業療法士（OT）1名　言語聴覚士（ST）1名

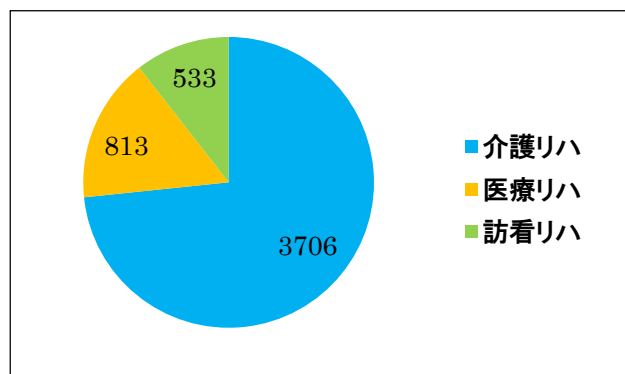
2. 臨床実績

訪問リハビリテーション（リハビリ）は、介護保険と医療保険の訪問リハビリ、および訪問看護ステーションからの訪問リハビリを実施しております。

2021年度の実施件数は、別表（表1、図1）の通りとなっています。

（表1）各訪問リハビリテーション実施件数

訪問リハビリ種類	実施件数
介護訪問リハビリ	3706件
医療訪問リハビリ	813件
訪問看護リハビリ	533件



（図1）各訪問リハビリテーション実施割合

3. 1年間の活動と今後の展望

2021年度の訪問リハビリは「シームレスな医療と介護の連携」、「業務の効率化」「新規利用者の増加」「訪問リハビリ介入の質の向上」を目標に取り組みました。

「シームレスな医療と介護の連携」では、訪問リハビリ利用者のうち医療対応が必要な方を見逃さないように、チームカンファレンスで共有し、入院加療が必要な方は、院内のベッドコントロール会議に紹介するようにしました。また、当院に入院されている患者様で退院後の訪問リハビリ利用が考えられる対象者については、訪問リハビリの合間で代理介入するようにし、円滑な訪問リハビリ以降に繋げました。今年度の院内リハビリスタッフからの訪問リハビリ紹介数は13件になっています。

「業務の効率化」は、サービス提供表確認作業と他部署との情報共有方法について、部門システムを活用したデジタル化で、時間外業務の減少とペーパーレス化に繋げました。

「新規利用者の増加」は、訪問リハビリ利用者様よりよせられた「訪問リハビリの内容や料金についての分かりにくさがある」との声を踏まえて、新たなパンフレットの作成、配布を行いました。また、言語聴覚士による訪問リハビリ機会の増加や、サ高住における退院後早期の集中的な訪問リハビリの提供を行いました。パンフレット完成が2022年1月と年度末に近かったこともあり、結果として新規利用者増につながりませんでした（新規利用者推移、2020年度50名→2021年度49名）、今後の利用予定者には、訪問リハビリについての説明用ツールとして活用していける体制が整いました。

「訪問リハビリ介入の質の向上」は、定期的な評価項目（表2）を確立し、利用者様のカンファレンスを客観的な評価をもとに行うようにしました。結果、個別性ではありますが、訪問リハビリの効果を目に見える形とすることにつながりました。

（表2）訪問リハビリテーション定期評価項目

Hb-LSA（屋内の生活空間）	GDS-S-J（精神機能）
5回立ち上がりテスト	BMS（日常生活動作能力）
握力	MSQ（意欲）
FIM（日常生活自立度）	QOL-HC（生活の質）
Zarit8（介護負担感）	VI（気分の評価）

2022年度は、訪問リハビリ担当者を減らしての運営を考えております。そのためには、訪問リハビリ担当者間、および当日の訪問リハビリ代行者との情報共有を密にし、利用者様に安心して訪問リハビリを受けられる体制を構築していくことが求められ、目指していくべき所と考えています。また、2021年度に取り組んだ定期的な評価について、項目数が多く、利用者様へのリハビリ提供時間が少なくなってしまう反省点がありましたので、評価項目数の整理を行い、リハビリ内容の質を高めていくようにしたいと考えております。

（山口 良樹）

通所リハビリテーション事業所（デイケア）

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

6-7時間

理学療法士（PT）	6名（パート1名を含む）
作業療法士（OT）	1名
看護師	4名（パート1名を含む）
介護福祉士	6名
ケアスタッフ	9名（（パート4名を含む））
事務	2名

1-2時間（短時間通所）

理学療法士（PT）	5名
ケアスタッフ	5名（パート5名、医療リハビリと兼任を含む）

2. 臨床実績

2021年度の1日の平均利用者数、利用延べ人数や社会参加数は、表1の通りとなっています。社会参加率は5%を超え、移行支援加算を算定しています。また、6-7時間、短時間通所ともにリハビリテーション提供体制強化加算を算定できるリハビリスタッフの体制があります。介護度の比率は、図1・図2となっています。

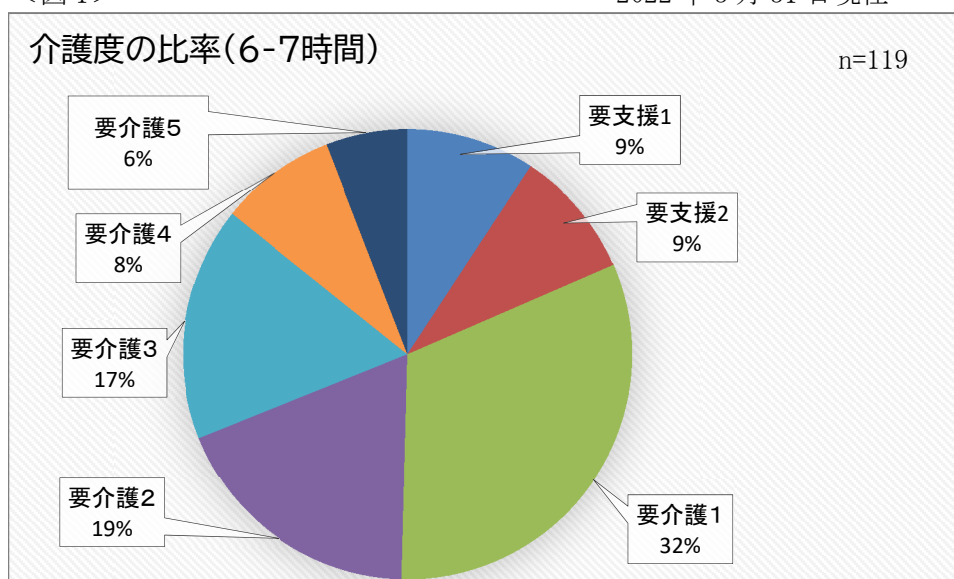
<表1>

	1日の平均利用者数	利用延べ人数	社会参加数
6-7時間	39.5	11,604	8
1-2時間（短時間）	20.7	6,059	10

※ 社会参加＝卒業や地域活動、デイサービスへ移行など。 要支援者も含む人数。

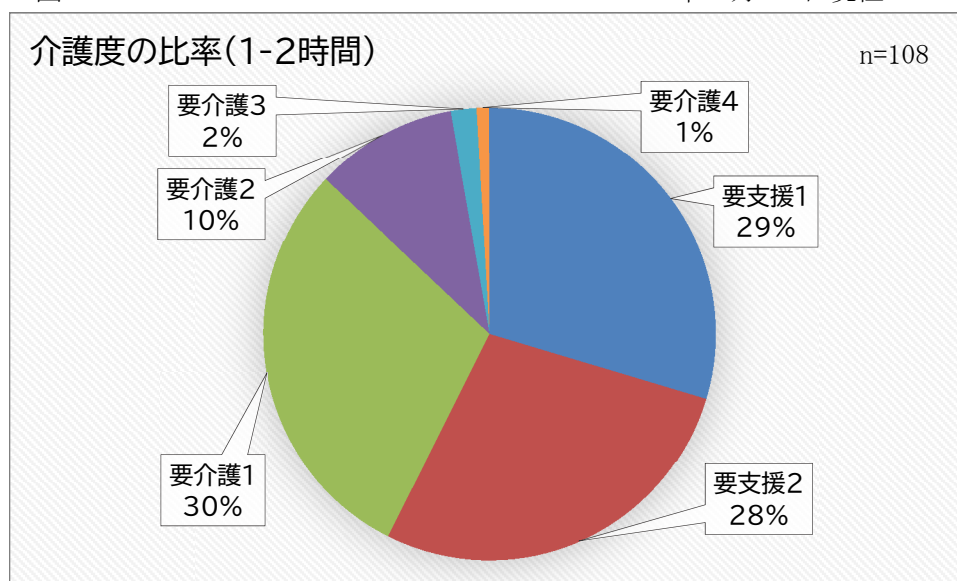
<図1>

2022年3月31日現在



<図2>

2022年3月31日現在



3. 1年間の活動と今後の展望

通所リハビリテーションは、2021年度の目標の中でも「自立支援」、「介護負担の軽減」、「勤務環境の改善」に重点的に取り組みました。

自立支援においては、利用者さんの80%は、ADLが維持・改善されました。また、介護される方の負担になっている事を把握し、個別的に支援を行いました。それらの活動により、在宅生活が継続され、施設へ入所される方の割合が例年より減少しました。

「勤務環境の改善」においては、TQM活動として5Sを推進し、利用者さんがより過ごしやすい環境が整い、スタッフの業務も効率化する事が出来ました。

2022年度も「地域のお年寄りと利用者様が在宅において、その人の有する能力に応じ、その人らしく日常生活ができるように支援します」を理念として、利用者様・ご家族へより質の高い支援ができるようにスタッフ一同努力をしております。

(椎葉 博基)

事務部総務課

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

事務職員	7名	（課長1名 主任2名）
事務職員（パート）	3名	
メッセージ・リネ管理（パート）	5名	

2. 1年間の活動と今後の展望

2021年4月に総務課に新卒者を採用しました。これまでは病院内の異動や中途採用が多かったのですが、総務課職員は年齢が40～50代に偏っていること、新人育成の経験は総務課職員のレベルアップに繋がること、また総務課のチームとしての連携強化を期待し、新卒者採用に至りました。新人への指導を通して、業務改善の必要性を認識したり、自らの電話対応や言葉遣いを改めて見直す良い機会となりました。今後も、成長を続ける総務課でありたいと思います。

2020年度より開始したTQM活動は、2回目の2021年度も総務課としてエントリーし、職員からの問い合わせが多かった各種届出の内容、書式、保管場所等の見直しを行うとともに、担当以外の総務課職員も対応できるよう業務改善を行いました。今回の取り組みは今後のDX化に向けて取り組む足掛かりになったと思います。

2020年度に引き続き、新型コロナウイルスは業務に大きな影響を与えました。診療・検査医療機関、ワクチン接種医療機関としての業務に加え、5月より陽性患者受入病床を確保することとなり、経験したことのない状況の中で通常業務と新型コロナウイルス対策業務を行うこととなりました。院内の各部門との協力が強化され、医療に携わる者としての総務課の役割を認識しました。

新型コロナウイルスは病院経営に大きな影響を与えましたが、病院全体が少しずつ新型コロナウイルスを受け入れながら通常業務を行う体制となってきました。総務課はこの経験を活かし、緊急事態に対応できる設備・物品・人員管理を行うとともに、コスト管理にも更なる注力が必要だと考えております。より良い医療環境、職場環境となるよう、総務課全員協力して取り組んでまいります。

（瀬戸 早苗）

事務部医事課

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

事務職員（医事課内・受付含）	11名
事務職員（医事課内・受付含）パート	4名
診療情報管理室職員	3名
医師事務作業補助者	5名
医師事務作業補助者 パート	2名
病棟クラーク パート	4名

2. 1年間の活動と今後の展望

2021年度の活動の中心は、前年度に引続き「働き方改革」と「スタッフ育成」でした。

働き方改革については、2019年度から継続的に活動しており、これまで基本的に時間外に行なっていたレセプト業務について、時間内に行なえるよう体制を整備しました。結果、活動開始前の約半分まで時間外業務を削減出来ましたが、まだ削減の余地はあると考えます。今後も調整を継続し、子育て世代でも安心して働ける体制づくりを目指します。

スタッフ育成については、医事課内スタッフはレセプト業務について、全体的な底上げによりスタッフ間の業務量の偏りを軽減すること、返戻レセプト件数の減少させること、を目標としました。前年度開始したTQM活動（返戻レセプト件数減少）を継続し、全員で返戻内容把握、再請求準備を行う方式をとることで返戻理由を理解するスタッフが増え、スタッフ底上げにつながっています。ただ、新型コロナ対応に伴う公費の複雑化により、医事会計システムで対応出来ない事例が増え、結果として返戻件数が増加している月もありますので、底上げ出来た分、全員で課題に取り組みたいと思います。診療情報管理室は、病棟クラーク、医事課内スタッフと連携し、病棟での必要書類不備、スキャン誤り等を減少させるべく取り組みました。また、電子カルテ導入期にストップしていた「質的監査」を再開し、診療録の質を更に向上させるための取組を今後も継続します。医師事務室については、新たに腎臓内科医師の業務を一部代行することも開始する等、医師事務作業補助者としての活動の場を拓けるとともに、スタッフ底上げの為、陪席科のローテーションも継続しています。

医事課内スタッフについては、患者負担、レセプト請求及び診療に係る様々な業務、診療情報管理室については、診療録記載全般と国に提出する様々なデータ作成に関する業務、医師事務作業補助者については、医師が行う指示、記載等及び書類作成に関する業務、そして病棟クラークは、病棟における記録方法変更対応及び患者対応、と業務内容は異なりますが、それぞれが調整を重ね、当院に合った形を目指して活動してきました。今後もそれらの活動を継続していきます。

システム導入と時間外業務減少により、子育て中の職員も安心して働ける環境整備と、教育による医事課全体のレベルアップを今後も進めていきます。

（渡邊 英則）

地域連携室

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

- 医師 1名
- 医療ソーシャルワーカー(以下 MSW) 5名
- 看護師 2名
- 事務 2名

2. 1年間の活動と今後の展望

地域連携室は、主な役割である連携業務と入退院支援業務を通して、地域の医療、福祉、保健機関との連携を図り、患者さんが安心して継続的に医療・看護・福祉を受けることができるように、また住み慣れた地域で、その人らしい生活を送ることができるように支援することを目指しています。

連携業務に関しては、地域の医療機関や介護福祉施設、各事業所や行政等を訪問し、面会することで、積極的な情報共有に努めております。具体的な活動としては、近隣クリニックを年間約240回訪問し、返書などを直接手渡しするなど、顔の見える連携を日々心がけております。

また2020～2021年度は新型コロナ感染拡大の影響のため、地域に向けた活動は行えませんでした。2014年からは地域の公民館などに病院のスタッフを派遣して、専門職による健康講座を開催するなど、地域住民の方の健康増進を目的とした活動にも力を入れております。

入院支援に関しては、看護師とMSWの双方が疾患別に担当を決め、専門的に対応できるように入院の相談窓口として機能しております。今後は、他の医療機関とオンライン上での情報のやり取りが可能なクラウドサービスを活用するなどして、より円滑でスピーディーな対応ができるよう入院支援体制を確立していきたいと思っております。

退院支援はMSWが担当し、より多くの患者さんに早急に介入できるよう、また細やかな対応ができるように各病棟に専属のMSWを配置しております。2020年度からは相談件数が月平均1000件に達するなど相談件数は年々増え、相談内容も複雑、多様化しているのが現状です。そのような状況下で、院内外の多職種との連携を図り、チーム一丸となって退院支援に取り組んでおります。

地域包括ケアシステムの構築、推進が求められる中、今後は設置予定の入退院支援センターのスタッフとも協力しながら、地域とのつながりをより強化し、在宅支援病院としての役割を担うべく、切れ目のないシームレスな医療が提供できるよう努力していきたいと思っております。

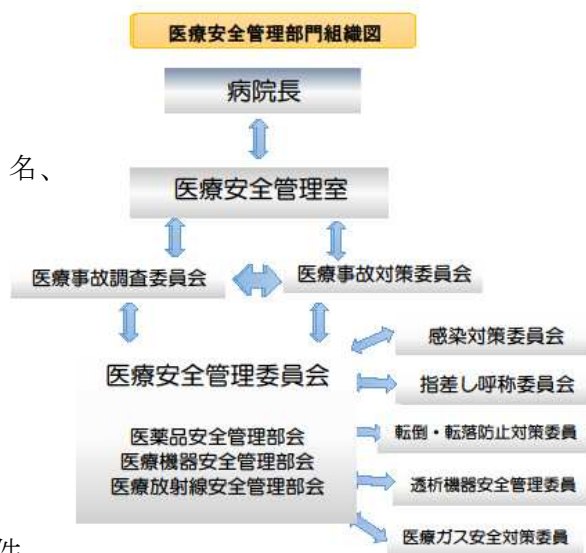
(八島 佐知)

医療安全管理委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

医師 2 名、医療安全管理者 1 名、看護部長 1 名、
副看護部長 1 名
各部署責任者 18 名



2. 1年間の活動と今後の展望

1) 2021年度総括

事故報告件数は医療事故 5 件、転倒・転落 4 件、
針刺し・切創事故は 4 件と前年度より減少している。

(図 1 参照)

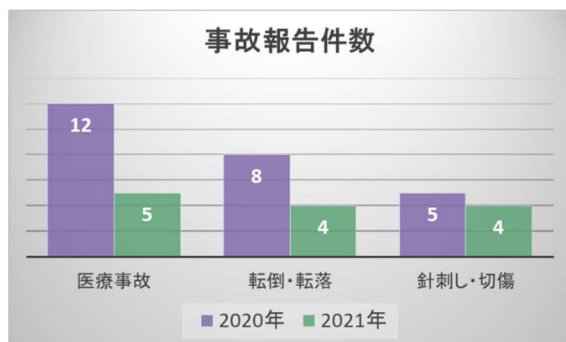


図 1 事故報告件数

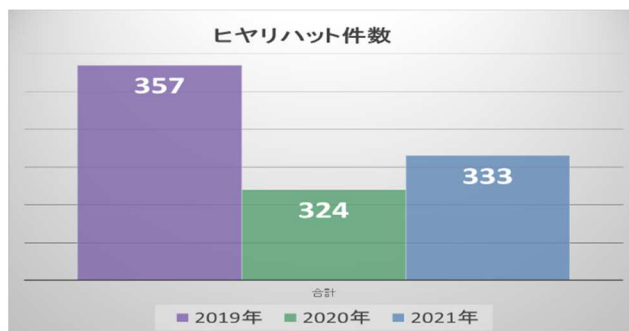


図 2 ヒヤリハット報告件数

ヒヤリハット報告件数では 333 件と前年度より増加、内容は与薬 (27.6%) 注射 (19.8%) 治療・処置 (7.8%) の順に多い。(図 2.3 参照)

ヒヤリハットレベルでは指差し呼称委員会で「レベル 0」報告を増やし「レベル 2」以上を減少させる取り組みを行い、「レベル 0」報告が全体の 84.1%と前年度より大幅に増加したが、「レベル 2」は 33 件から 146 件、「レベル 3a」は 18 件から 92 件と増加しており対策の検討・強化が必要である。(図 4 参照)

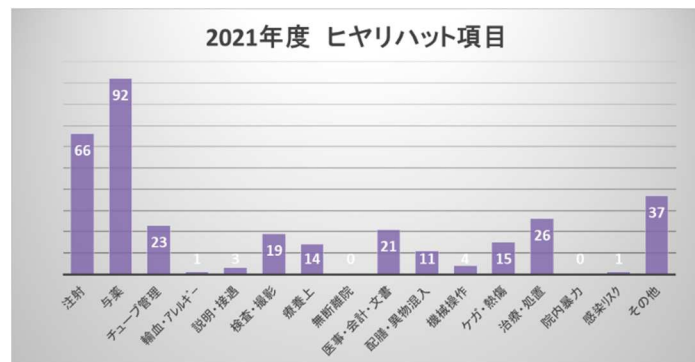


図 3 ヒヤリハット報告内容

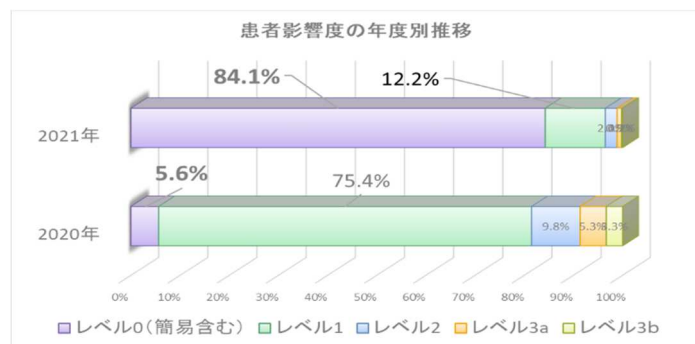


図 4 ヒヤリハット報告レベル

また、オカレンス報告書の書式を変更し、オカレンスレポートを医療事故調査制度該当者の判定につなげるよう体制を整え、2020年1月より使用開始した。2020年度は「来院後24時間以内の死亡事例」9件、「予期せぬ死亡」3件、「予期せぬ患者の急変」1件の報告があり、医療安全管理室にて検討し、全て追加報告書の必要性なしとの判断であった。

2021年度に実施した主な取り組みは以下のとおりである。

- (1) ヒヤリハットレベル0（簡易報告）の条件を定め、レベル0報告の推進
- (2) ベッドの安全使用のための定期点検開始(年4回)
- (3) 転倒予防のため、透析室から2階北エレベーターまでの廊下に手すり取付
- (4) ファックス誤送信防止マニュアル作成
- (5) 経鼻チューブ自己抜去予防のため、経過表に観察項目セットの設定

2) 今後の展望

各部署定期巡回の方法、内容の検討を行い、2021年度より「患者確認」「ダブルチェック方法」「アレルギー対策」「与薬時の安全」「救急時の対応」「安全な環境」「個人情報管理」の各項目に関して、医療安全管理室メンバーが全部署を対象に年2回の定期巡回を行っている。定期巡回の結果を安全意識の向上に活かせるよう働きかけを行う。

薬剤に関するヒヤリハットの分析、対策検討は医薬品安全管理部会の中で継続する。またヒヤリハットレベル0報告の増加を受けて、正確なレベル判定のための体制づくり、再発防止への活用方法の検討、レベル2以上の報告件数の減少を目指して指差し呼称委員会での活動を活性化させる。

(三井 淑子)

医薬品安全管理部会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

薬局長1名（医薬品安全管理者）、医師1名、医療安全管理者1名、看護師長3名

2. 1年間の活動と今後の展望

1) 2021年度の総括

昨年度のヒヤリハット報告件数は全体で333件、そのうち注射・与薬に関する報告件数は159件（48%）であった。特に薬剤に関するヒヤリハットの中で「配薬漏れ」に対する事例が多かった。

まず、薬剤科における対策として、調剤方法（持参薬も含めた）を全病棟で統一し、今年度より定期処方も全病棟に拡大を行い、配薬確認を行う看護師業務の負担軽減につながる取り組みを行ってきた。薬剤に関するヒヤリハット事例の中には、薬剤に対する知識や理解不足だった事例もあり、「院内における薬品検索の活用方法」について院内研修を実施し、日常

業務における医薬品の適正使用や安全管理に活用できるよう努めた。

次に、病棟における対策として、昨年度の「配薬漏れ」の分析結果で明らかになった原因について、全病棟統一した対策案を考案した。看護師主任を中心とした働きかけを行い、対策に対するアンケートを実施するも、「配薬漏れ」の件数は残念ながら減少傾向に至らなかった。

2) 今後の展望

次年度も定期的に委員会を開催し、医薬品使用時の安全対策の実施が継続的に行われているかを見直すとともに、各部署での問題事項を把握しながら、事例の分析・対策に繋げていきたいと思えます。次年度も薬剤に関するヒヤリハットの中で「配薬漏れ」に対する事例が多いため、引続き各病棟で対策を再度検討し、評価を行っていきたいと考えています。

(貝田 裕彰)

医療機器安全管理部会

1. スタッフ紹介 (2022年3月31日現在)

【構成メンバー】

医療機器安全管理者 (常勤医師) 1名、医療安全管理者 1名、看護師長 1名、臨床工学技士 1名、放射線技師 1名、臨床検査技師 1名、事務職員 1名

2. 1年間の活動と今後の展望

医療機器安全管理部会は平成 19 年に発足し、医療安全委員会の部会として医療機器に係る安全管理を行っています。本会は必要時に開催され、以下の活動を行っています。

1. 医療機器安全管理部会議を開催し、医療機器に関する事故やヒヤリハット事例の検討と安全管理委員会への報告
2. 医療機器保守点検に関する計画の策定と実施
3. 医療機器の把握と管理および適切な情報提供
4. 人工呼吸器や体外式除細動器などの生命に直接影響を与える医療機器の厳重な管理と点検
5. 医療機器の添付文書の管理
6. 医療機器安全使用のための職員研修の実施
7. 医療機器の安全管理に関わる研究会や講習会への参加

2021 年度は医療機器に関するヒヤリハット事例は 5 件報告されました。いずれも機器の故障が主であり、患者様に被害が及ぶ事故はありませんでした。職員研修は計 18 回開催され、医療機器の安全使用に努めています。

(横山 昌典)

医療放射線安全管理部会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

放射線技師長1名（安全管理者）、医師1名、リハビリテーション科ST1名、看護師1名

2. 1年間の活動と今後の展望

1) 2021年度の総括

2021年度は9月にCT装置の更新を行い、より低被曝で短時間に撮影可能な装置が導入されました。当院のCT検査被曝線量の統計は、診断参考レベル（DRL s 2020）と比較しても、頭部・胸部・腹部・骨盤部のいずれの部位においても基準値を十分にクリアし、より安全な検査を受けていただけるようになりました。

2020年4月より医療被曝管理の義務化が施行され、それに伴いこの委員会を設置することとなりましたが、この背景として日本の医療被曝の現状は患者1人当たりの被曝線量が世界平均と比べ約6倍高いことが指摘されています。また、米国と比べ一般X線撮影では4.7倍、CT検査では1.5倍と高い結果が出ています。このことから検査を依頼する医師や検査を施行する技師等の医療被曝への意識を高めることが必要となりました。

委員会では、医療被曝に関しての指針を策定し、定期的な会議を開催することで被曝線量の適正化を図り、更に放射線に従事する職員を対象として年に1度の研修を行い、被曝に対する知識の共有に取り組んでいます。

2) 今後の展望

次年度は被曝線量の更なる低下を目指し撮影条件を調整し、当院の医療被曝について分析し検討していきたいと思えます。また、医療被曝への意識を高め被曝低減へ努め、安心して放射線検査を受けて頂けるよう努めていきたいと思えます。

（久間 伸彦）

転倒・転落防止対策委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

医療安全管理者1名、 看護師6名、 通所リハビリテーション1名、
リハビリテーション科1名

2. 1年間の活動と今後の展望

1) 2021年度総括

昨年に引き続き、患者の療養環境を安全に保つことを目標に部署巡回を年5回計画したが、病棟スタッフ・患者からコロナ感染者が出た為、2回は自部署の巡回に切り替えた。各部署特有の問題点の解決策の検討、評価に活用した。対策を行うことで、指摘事項の減少につながった。

転倒・転落ヒヤリハットの分析では、2021年度転倒転落事故報告件数は4件（前年度より4件減少）、ヒヤリハット報告件数は210件（前年度より27件減少）、レベル別ではレベル1が134件（65%）をしめ、レベル2は41件（12%）、レベル3aは26件（9%）と前年度と比較し、レベル2・3aの件数増加がみられた。

原因は患者の状態把握不足、不可抗力、管理ミスの順に多く昨年度より減少傾向であった。認知症状悪化、病状進行に伴う転倒・転落が多いことがわかった。（図1.2参照）

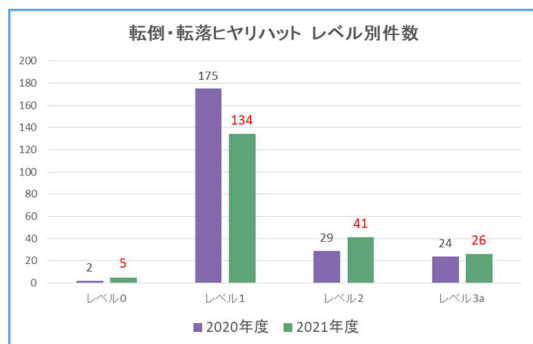


図1 ヒヤリハット レベル別件数

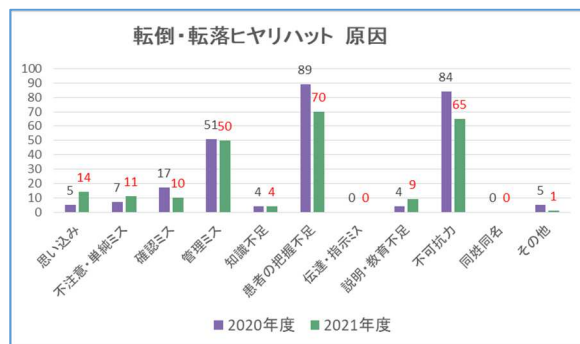


図2 転倒・転落ヒヤリハット 原因

2) 今後の展望

認知症のある患者や神経難病など障害のある患者が繰り返し転倒する事例が多いことがわかった。各部署の対象者の傾向を把握し、入院時の環境整備や援助方法の周知徹底、同時に外傷などを予防するための緩衝マットや安全ベルトの使用、低床ベッドの徹底など対策を実施する。また、血液浄化センターでは透析患者の転倒事故が発生した。実施した対策が効果的か継続可能かなど継続した転倒予防体制を確立する。

（三井 淑子）

指差し呼称委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

委員長（看護師長）1名、 各部署(18部署)代表スタッフ1名

2. 1年間の活動と今後の展望

指差し呼称委員会は医療事故ならびにヒヤリハットを防止するための指差し呼称の意識向上とその徹底を目的に設置されている。

2020年度から引き続き各部署で特有の場面を想定し、KYT勉強会を実施し、全部署が事例を発表した。また、「指差し呼称実践指導ができる」という目標では2020年度の意識調査結果で「正しい手順をしらない」の回答が17%と増加傾向にあり、6月に臨時での学習会実施、その後年間かけて全部署で指差し呼称動画を作成した。部署ごとに重要な確認項目をあげて、動画で学べることで確実に実践できるよう2022年度の活用を推進する。

呼称意識調査を前年度と比較すると「間違いに気づいたことはあるか」85%から83%「予防できたインシデント経験はあるか」75%から77%と指差し呼称の効果を感じていると考えられる一方で、「指差し呼称を省くことはある」51%から57%と増加し、指差し呼称を省く理由として「時間がかかること」48%から63%であった。今後、各部署で指差し呼称項目の検討が必要と思われる。

総合評価としては指差し呼称関連のヒヤリハットは前年度63.1%から64.7%と増加しており、継続した活動が必要である。

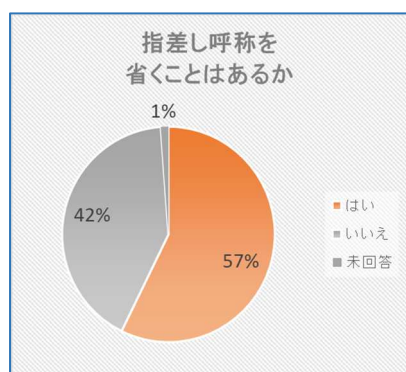


図1 指差し呼称を省くことはあるか

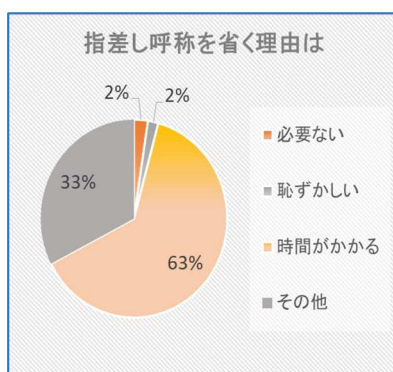


図2 指差し呼称を省く理由

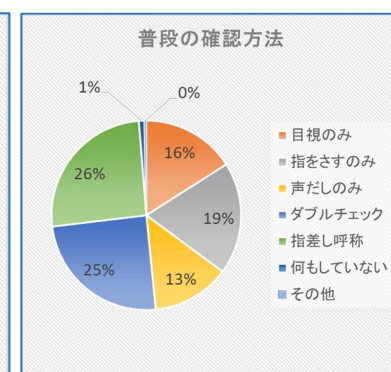


図3 普段の確認

(三井 淑子)

院内感染対策委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

病院長、 副院長（感染対策医）、 看護部長、 事務長、 感染対策看護師、 薬剤師、
検査技師、 総務課

2. 1年間の活動と今後の展望

月1回、委員会を開催していますが、迅速な対応、提案を行うためにイントラネットを活用してコロナウイルス感染症に対する体制を構築しました。また従来週1回の院内巡視に加え、コロナ対策として各部署の感染対策の巡視を追加しました。業務としては

1. 細菌 院内で検出された細菌の種類、耐性菌の動向についてサーベイランスを行い、抗菌薬の感受性を院内共有ファイルからいつでも供覧できるようにしています。医療関連感染とくにCVカテーテルと尿留置カテーテルに伴う感染症（CRBSIとCAUTI）については検体数から毎月件数を計上していますが昨年度からSSIを開始し来年度からVAPサーベイランスを開始予定です。
2. 抗菌薬適正使用 使用する際には菌の同定ができているか、適切に臓器感染症の診断ステップを踏んでいるかなどをその都度確認するように促しています。菌血症が疑われる場合にはいつでも2セット（4本）の血液培養を採取しています。各部署にJAID/JSC 2019感染症ガイド、医療介護施設関連肺炎、市中、院内肺炎ガイドライン、呼吸器学会より2017年成人肺炎ガイドライン簡易版を配布。抗微生物薬の適正使用指針を各診察室に常備。カルバペネム系、抗MRSA薬のバンコマイシン、テイコプラニン、ハベカシンとゾシンは届出制で、ザイボックス、シベクトロ、キュビシン及び抗CDI薬フィダキソマイシンは許可制です。薬剤師がTDMを作成し適量投与と血中濃度による修正を行っています。抗菌薬の使用状況についても把握し偏りがある場合は医局会で伝達しています。西部地区で耐性菌や抗菌薬使用状況について情報交換を行っています。
3. その他の感染症 新型コロナウイルス患者に対し外来ゾーニングにて患者動線を完全に分離、屋内に簡易ブース、屋外にプレハブを設置、PPEの実習実施、マニュアルを整備。抗原定量検査（ルミパルス）を導入し診療検査機関として届け出し複数検体の院内処理能力を向上させ冬季にはインフルエンザの抗原定量検査も同時に検査。時間外はスマートゾーン（PCR）を施行しましたが1時間かかり年度末にID NOW（等温核酸増幅）を導入し15分で結果が判明するようになりました。当院ではがん患者、ハイリスク患者の診療を継続するべくウイルス感染症の侵入防御を行いながら安全に診療ができるように日々努力しています。
4. 教育 各病棟にICNとリハビリにもリンクスタッフを新設し、対策の徹底や啓蒙活動を行っています。年2回、職員全員を対象に院内教育を行っています。
5. 院内感染対策マニュアル 国立病院機構の病院感染対策マニュアル2020年3月増補版を参考にマニュアルを一新しました。新型コロナウイルス感染症に対するマニュアルをイントラネット、電子カルテ内で表示していますがマニュアルにまとめて編集しています。

6. 資材の工夫 酒精綿はディスポ製品の導入を数年前にしていますが、さらに消毒スティックや輸液、注射キット製品の導入などリスクの減少と包交車の廃止をめざしています。リキャップ防止対策としてプラスチック針を導入しました。新型コロナウイルス感染症の対応でPPE再利用についてマニュアルを整備。院内備蓄を管理、報告体制を整えました。
7. 感染対策加算 当院は加算2を申請し福岡大学病院等と連携し医療感染対策の向上を図っています。感染対策カンファレンスに定期的に参加しています。手指消毒薬消費量を毎月カウントし部署へ報告が開始され啓蒙されるようになり使用量が増加しています。

(柴田 隆夫)

院内教育委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

医師 1名 看護部 1名 臨床検査技師 1名 臨床工学技士 1名 事務部 1名

2. 1年間の活動と今後の展望

教育委員会の役割は、研修を通して、信頼される医療の提供、質の向上はもとより、全職員の職場環境を改善しより健康的に業務が行えるように支援することにあります。毎月1回定例会を開催していますが、活動内容は1)研修に必要な物品購入の検討、2) 研修報告の受理、重要な案件の院内への周知、3) 研修の企画、実行、4) 院内の各委員会に依頼して行う研修の計画作成などです。医療安全、救急や感染対策など病院機能に必須の項目を含め幅広く研修を計画しています。今年度はコロナ感染対策のため、web や資料配布が主体でしたが感染対策、ACLSは部署毎に実習をおこないました。研修に参加できなかった職員のために、とくに感染、医療安全など重要な項目についての周知を図るため、研修のビデオ撮影を行い、後日閲覧するようにしています。救急蘇生、感染対策の充実のために実習用の人形、手洗いチェック用蛍光灯を購入し各部署で実習を行い診療レベルの維持を図っています。ハラスメント、個人情報についても連年、研修に取り入れています。必修項目として関連法規については各部署で周知を図るように企画しました。

(柴田 隆夫)

月	テーマ	概要	担当	参加数
4	BLS	実習	救急委員会	全職員
5	感染対策	動画学習、部署実習	感染対策	全職員
6	ACLS	実習	救急委員会	186
7	ハラスメント	資料配布	サービス向上	308
8	災害対策	訓練	災害対策チーム	コロナで中止
9	リスクマネジメント	資料配布	医療安全	全職員
10	臨床倫理	意思決定支援	倫理委員会	全職員
11	高齢者評価	資料配布	循環器医師	239
12	接遇	資料学習	サービス向上	全職員
1	感染対策	Web 研修	感染対策	全職員
2	医療安全	動画学習	医療安全	全職員
3	個人情報保護	Web 研修	サービス向上	全職員

サービス向上委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

事務部長、医事課長、総務課主任、通所リハビリテーション主任（理学療法士）、
看護主任、看護師（病棟・総合相談室）、放射線技師

2. 1年間の活動と今後の展望

昨年、新型コロナウイルス感染症の蔓延を鑑みて中止した外来患者満足度調査は、書式を変更して短時間で回答が出来るようにするなどの感染対策を講じて実施し、回収率 72.9% と多くの患者様より意見を聴取することが出来ました。長年に亘りご指摘を受けておりました待ち時間について、診察・会計・門前薬局の全てで大きく改善しており、電子カルテをはじめとした電子化やQRコードを用いた薬剤情報連携への着手が奏功したと考えております。入院患者様を含めて満足度調査や投書箱を通じた激励やお叱りなど様々なご意見は、患者サービスに取り組む機会となっています。全館でのWi-Fi環境整備を要望する声を多く頂戴しており、今後の課題として取り組む必要があると考えています。

昨年度よりサービス向上が中心となって取り組みを開始した Total Quality Management (TQM) 活動は、2年目を迎え、10サークルが様々なテーマで活動しました。更に、昨年度の最優秀賞サークルは、継続効果の検証としての発表を行い、TQM活動の目標である継続的な改善活動の重要性を職員に伝えて頂きました。サービス向上委員会は、当院が地域の掛かりつけ医療機関として、患者様方から選ばれる病院であり続けることを目標として、TQM活動推進のサポートなど、今後も活動を継続して参ります。

（北野 晃祐）

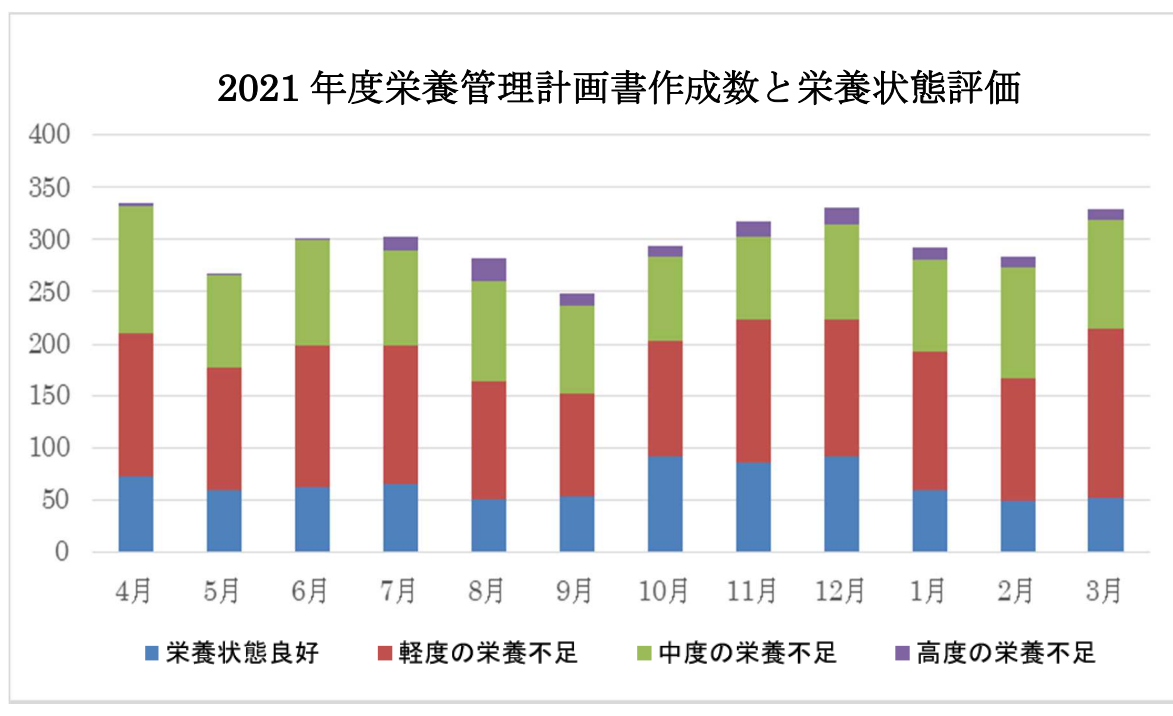
NST 兼栄養管理委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

医師 1名、 管理栄養士 2名、 栄養士 1名
看護師 5名、 言語療法士 1名、 薬剤師 1名

2. 臨床実績



3. 1年間の活動と今後の展望

活動内容：NST 回診及び検討会（毎週水曜日）

栄養管理委員会（第3水曜日）

NST（Nutrition Support Team：栄養サポートチーム）は、最適の栄養管理を提供する為に、他職種で構成された医療チームです。栄養管理は全ての疾患に共通する基本的な医療であり、NST の介入は複数の職種がお互いの知識を持ち寄り、チーム医療を行うことにより最善の治療につなげることが目的となります。

多職種協働で栄養状態・管理を評価・情報共有し、様々な視点から個々の患者さんに合った栄養管理を提供できるように努めています。NST 回診では患者さんの全身状態や摂食状況を把握し、経過をみて対策していくことで早急な栄養状態の改善を図っています。

急性期疾患に限らず、高齢者、嚥下障害、認知症、神経疾患、糖尿病、腎不全（人工透析を含む）、終末期などの様々な患者さんに対し、最適な栄養管理を行い、患者さん・ご家族の不安の軽減、症状緩和や褥瘡の発生を防止し、早期退院や社会復帰を助けることを目指してまいります。

（吉田 亮子）

褥瘡対策委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

〈回診メンバー〉

皮膚・排泄ケア認定看護師 1名
理学療法士 1名
栄養管理士 1名
褥瘡対策委員長 看護師 1名

〈各部署褥瘡対策委員会メンバー〉

各部署主任 計6名

2. 臨床実績

褥瘡対策委員会は入院中の患者さんの褥瘡発生、悪化防止対策、治癒促進。

回診	第1, 3木曜日 14:10～
今年度の入院患者総数	1965名。
褥瘡院内発生者数	45名
院外からの持ち込み数	53名
発生率	2.151%

3. 1年間の活動と今後の展望

2021年度の院内発生者は深度Ⅰ（持続する発赤）からⅡ度（真皮にとどまる皮膚障害 浅い潰瘍）でとどめることが出来ており、院外からの持ち込みⅢ度（皮下脂肪層にまで及ぶ褥瘡）の患者さんも長い経過を過ごされましたが、4か所あったものも1か所の深度Ⅱ改善し施設退院されました。褥瘡発生は患者さんのQOL低下につながります。痛みを伴ったり、治療が必要となることで退院が延びることもあります。一番は発生させないように予防対策を講じる事です。全身の皮膚の状態（乾燥部位やスキンテアの有無など）や栄養状態（日頃の食事摂取状況や検査データなど）活動性（リハビリの状況やベット上でのポジショニングなど）や排泄物の性状など病棟スタッフからの聞き取りや回診メンバーそれぞれの専門的な知識を持ち寄ることでケアの方針を決定します。また病棟以外でも外来、在宅療養中の患者さんのスキンテアや褥瘡、腫瘍処置などのアドバイスも行っています。皮膚、排泄ケア認定看護師の指導の下3年目を迎え日頃の保清、保湿などのスキンケアの重要性も浸透していると思います。次年度は、より多くのスタッフへ褥瘡対策についてスキンケアについての知識向上を目的として定期的な研修会を計画しています。

今後も褥瘡深度Ⅰ以上の発生0を目標とし、各部署のスタッフ全員が統一したケアの提供を行うことができるように教育活動を行っていく事、連携しあう施設への指導的役割を果たすことができるような活動をしていきたいと考えています。

（高田 真弓）

認知症ケアチーム

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

医師 1 名 看護師 8 名 薬剤師 1 名 作業療法士 1 名 MSW 1 名
介護支援専門員 1 名 診療情報管理士 1 名

2. 臨床実績

認知症ケア加算Ⅱ算定状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
算定患者数(人)	48	52	48	52	41	39	42	38	38	37	57	59	46
金額(円)	356,550	455,900	322,150	381,450	322,700	269,200	304,800	270,400	293,700	327,250	427,850	440,550	379,013

認知症巡回 年間延べ 37 名

臨時巡回 年間 27 名

3. 1年間の活動と今後の展望

高齢者や認知症の患者さんは、入院といった環境の変化に適応しにくいいため、せん妄を発生したり、入院を契機に認知機能の低下や認知症の症状の悪化を招くことがあります。認知症ケアチームは、多職種で構成されそれぞれの専門性を生かし、患者さんの問題に応じ主治医、病棟スタッフと協力しながら療養環境の支援を目的としています。

1) 病棟巡回

医師、看護師、薬剤師、作業療法士が、月2回（第1、3水曜日 14:30～15:30）依頼があった患者さんの所へ巡視にしています。夜間せん妄、帰宅願望、昼夜逆転、大声を出すなどの BPSD に対して薬剤の調整、院内デイケアの促し今後の方針などを検討しました。せん妄回診ではタイムリーに病室訪問しスタッフへの助言を行いました。

2) 研修の実施

今年度から認知症ケア研修コース（8コース）を行い参加者9名終了しました。認知症ケアに必要な知識を身につけサービスの質の向上に努めるという目的で講義、DVD聴取、グループワークなどを行いました。

また、看護師5名が認知症研修に参加し、各項目に分かれ動画にて全職員への勉強会としました。視聴人数は292人で74%でした。

3) 院内デイケア

コロナ禍で今年度も午後のみの開催となりました。

4) 今後の展望

今年度から認知症ケア研修コースを行い、職員の知識の向上に努めることが出来たため継続していき、研修内容も事例検討などを多く入れ実際の対応に役立つ研修にしていきたいと考えています。

コロナ禍で、家族の面会ができず不安感からせん妄や認知症が悪化する患者さんも多く

対応に苦戦しました。感染防止に努めながら院内デイケアの継続、病棟巡回の充実を図っていきたいと思います。

(江口 敦美)

地域振興委員会

1. スタッフ紹介（2022年3月31日現在）

【構成メンバー】

放射線技師 1名 臨床工学技士 2名 理学療法士 1名 臨床検査技師 1名
看護師 2名 介護福祉士 2名 視能訓練士 1名 総務 1名

2. 1年間の活動と今後の展望

病院 35 周年記念行事を契機として、「地域振興委員会」は継続した地域貢献活動を実施することを目的として 2018 年 7 月に発足いたしました。2021 年度は「ふれあい看護体験」と呼ばれる、県内の医療系の仕事に興味を持っている、高校生を対象にした、病院で働いている看護師やコメディカルの職員の働いている様子を実際に見てもらおうというイベントがありました。今年も、学生の訪問が難しい為、zoom を使ってオンライン上で行いました。そこで、当委員会では、各科の仕事内容の紹介を動画で撮影し、テロップを付けて、分かりやすくなるように編集しました。それをオンラインで動画を流して学生達に見てもらいました。

KARIN と呼ばれる広報誌の作成も、当委員会と総務部で作成していきました。病院のイベントや医師の紹介など、地域住民に向けた情報を作成し、発信してまいりました。

また、2022 年 7 月で当院の 40 周年、サ高住 10 周年を迎えるにあたり、病院 40 周年記念、サ高住かりん 10 周年記念行事を企画、運用する運びとなりました。

コロナも落ち着いてきて、地域住民の方と直接触れ合い、感謝を伝えられる絶好の機会だと感じています。地域振興委員会ですっきりと話し合い、地域住民の方楽しんでもらえるような企画を考えていきたいと思っています。

そして、地域全体を一緒に盛り上げていける存在になれるよう、これからも活動していきたいと考えています。

（塚園 慎也）

サービス付き高齢者向け住宅かりん

(訪問介護事業所かりん、通所介護事業所かりん)

使命：高齢者の方々が世代を超えて地域の人々や子供達と共に暮らしていける社会・

最期まで地域社会の一員として誇らしく暮らしていける街作りをしていきます。

理念：入居者に最期まで誇らしく、そして安心できるくらしの提供をしていきます。

1. スタッフ紹介 (2022年3月31日現在)

施設長 1名 事務 1名

訪問介護：サ責 1名 介護福祉 10名 ヘルパー 2名 看護師 2名 准看護師 2名

通所介護：主任 1名 介護福祉 3名 ヘルパー 1名 無資格 1.3名

2. 実績

	サ高住	通所介護	訪問介護			
	入居者数	利用者数	死亡数	男	女	疾患名
4月	52名	50名				
5月	52名	47名	1名		1名	パーキンソン
6月	52名	49名	1名		1名	心不全
7月	52名	52名				
8月	52名	48名	1名	1名		食道がん
9月	52名	47名				
10月	52名	45名	1名		1名	肺炎
11月	52名	44名				
12月	52名	44名	3名	1名	2名	心不全・HD・腎不全
1月	52名	42名	2名	1名	1名	盲腸癌・老衰
2月	52名	44名	2名	1名	1名	脳出血・老衰
3月	52名	46名	1名	1名		肺水腫
平均	52名	46.5名	合計 15名	2名	13名	

*死亡 12名 (うち『かりん』での看取り 10名)

3. 1年間の活動と今後の展望

1) サービス付き高齢者向け住宅かりん

①安定した経営

②職員が各自目標を掲げ、人材育成をしていく(志高一心)

③理念を大切に成長・挑戦し続ける企業

・事業収支 1,755万円/月目標⇒1,800万円/月で目標達成できた。

5月に職員1名コロナ発症し2週間デイサービス営業休止したが、感染の広がりなく後給付金等もあり、月平均1,800万円と経営は安定している。又少しずつだが、人も育ち、新たに介護福祉士実習も受け入れ、お互いの成長へと繋がっています。

最期まで医療・介護・看護を連携し安心して生活でき、看取りができる施設としての理念を継承しつつ、成長し続ける企業として職員一同頑張っています。

2) 訪問介護事業所 かりん

<コンセプト> 自立に向けた1ケア・1リハビリ・1ギフト

①受け持ちに深く関わり、願い・希望を支援する

②心をこめて1つ1つのケアを行う

- ・本人さん参加のもとチーム（受持ち・RH・家族・デイなど）で介護計画を立案し、皆で支援していくのを6月より開始しています。まだまだ、入居者を全人格的にとらえ、病気も含めたアセスメント・優先順位を考慮した介護計画の立案～実施～評価は、まだまだ不十分で勉強して必要はあるが、今後研鑽を重ね利用者さん本位の愛のある介護過程が展開できるようにしていけるように指導していくら。
- ・日常生活～ターミナル期～看取りまでの支援はご家族も喜んでくださり、スタッフ全員が丁寧に関わってくれている賜物です。そしてそれが、皆の介護の仕事の誇りと謙虚さに繋がっていている。ただ、毎日のケアに関しては、10周年を迎えるにあたり、私達が1番と誇れるように皆が質のいい介護を同じレベルで行えるように、再度原点に帰り勉強していく必要があると思う。

<サ責：大里>

- ・サ責としての覚悟や・責任が出来、業務も滞ることなく行えるようになった。今後入居者の変化に応じた迅速なケアマネ～関係者～家族への折衝が出来る様に研鑽を積んでいく。
- ・スタッフの教育を推進し、介護過程が展開できるように支援指導していく課題を取り組んでいく。

<事例発表>

- | | |
|----------------------------|--------|
| 1. チームによるご本人の豊かな社会生活への取り組み | 弥山 亮太 |
| 2. 透析入居者の看取りについて | 波多江 祐介 |
| 3. 短期集中訪問リハビリの提案 | 塚本 大輝 |
| 4. コロナによる人間関係に与える影響と支援の在り方 | 久松 めぐみ |
| 5. 最後の決断に関わって | 野田 江美子 |

<認知症初級指導管理士取得>

- ・6名取得 ⇒ 全体で現在9名取得 今後できれば全員取得を目指す

3) 通所介護事業所かりん

<コンセプト> 心・体・頭を元気にする

①人材育成（其々に役割を持たせ成長へ）： 金子（友岡の代行業務）

②くもんの充実（くもん運営：久松担当）：

くもん学習指導士育成（鳥羽・井上）くもん学習療法：16名目標・くもん事例発表

③入居者の希望・趣味活動・短期集中RH等を行っていく

- ・金子は、友岡の代行業務などが出来る様に、モニタリング・書類整理などの任を負い課題として、サービス提供票チェック・通所介護計画があるが、意識的に成長した。
- ・くもんは、学習指導士として鳥羽・井上を指導し、実践が出来る様になった。目標の16名達成できず13名にとどまり、次年度は当デイのくもん学習療法は重点項目でもあるので強化に取り組む必要がある。

課題であった事例は「コロナによる人間関係に与える影響と支援の在り方」

学習療法により新しいことへのやりがい・生活意欲の向上に繋がった事例をまとめる

事により、久松の成長に繋がった。

- 入居者参加のもとで毎月の四季折々の壁画や園芸活動を活発に行えた。又、RH担当の塚本の提案により、退院直後・入居直後の利用者に短期集中RHを行う事により、福祉用具の適正な選出やADLUPに繋がり、本当の意味でのチームとして利用者を皆で情報を共有し、支えていく構築が出来た。これは、今後継続をしていきたい。

平成25年8月に開設し、9年が過ぎようとしています。何もわからない中、スタッフも初めての仲間で、とにかく「最期まで安心して普通の生活で暮らせ、看取りまで行う」事を目標に無我夢中で走ってきたように思います。幸い皆様のご協力のもと、今では、少しは地域に根差し、神経難病（ALS等）以外は、スタッフの力も付き、看取りが出来る様になりました。そして、長い間の懸案事項であった、何か「かりん」の思いを短い言葉でスタッフに浸透できないかと思案し続けた結果「志高一心」という言葉に集約しました。これは、開設当時の志を忘れず、常に高い志をもって、1つ1つに心を込めて行いましょう。又心を込めての中には”人を慈しむ”の意味合いも含まれています。「かりん」の根幹を大切にしつつ、常に1つの所に留まることなく成長し続ける施設であろうと思っています。そして、今後は社会貢献を視野に入れ、みんなで頑張っていこうと思います。どうぞ、これからもご指導・ご協力お願いいたします。

(野田 江美子)

業 績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名 称
脳神経内科				
ウェアリング・オフの治療～COMTiの有効な使用方法を考える～	山田 猛	2021年 8月31日	WEB	オンジェンティス 一周年記念講演会
在宅療養支援病院における神経難病診療	菊池仁志	2021年 12月3日	WEB	パーキンソン病治療連携の会 in 福岡西部エリア
在宅療養支援病院における神経難病患者への総合支援	菊池仁志	2022年 2月18日	WEB	神経筋難病の在宅医療を考える会
健康増進・糖尿病センター				
当院での急性胆嚢炎の頻度と糖尿病合併についての検討	両林龍太郎、野中瑠以子、柳田育美、小野順子、吉田亮子	2021年 10月19日 ～20日	WEB	第59回 日本糖尿病学会九州地方会
一過性の急性胃拡張症をきたした1型糖尿病ケトアシドーシスの1例	吉田亮子、両林龍太郎、野中瑠以子、柳田育美、小野順子	2021年 10月19日 ～20日	WEB	第59回 日本糖尿病学会九州地方会
若年で認知機能低下を認め退院調整が難航した2型糖尿病患者の1例	山本幸恵、床嶋奈苗、犬束由起子、野中瑠以子、柳田育美、両林龍太郎、小野順子、吉田亮子	2021年 10月19日 ～20日	WEB	第59回 日本糖尿病学会九州地方会
当院での急性胆嚢炎と糖尿病の関連についての検討	両林龍太郎、野中瑠以子、柳田育美、小野順子、吉田亮子	2021年 9月21日	福岡	第518回 福岡市糖尿病アーベント
高齢者糖尿病治療について考える（SGLT2阻害薬の使用経験）	吉田亮子	2021年 10月13日	福岡	福岡市西区医師会講演会
当院の腎性貧血治療の現状（HIF-PH阻害薬のこれからの展望）	吉田亮子	2021年 10月12日	福岡	Stop CKD in 福岡エリア
臨床工学科				
人工透析排水除害装置の様々なトラブルを経験して	井手善和 庄山拓海 中山浩二 高橋真弓 藤本菜摘 村田敏明	2021年 6月5日	横浜	第66回 日本透析医学会学術集会・総会

業 績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名 称
リハビリテーション科				
大脳皮質基底核変性症患者の嚥下障害に対する言語聴覚療法の検討	木村 一喜	2021年 11月12日	WEB	第9回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
スロートレーニングがパーキンソン病患者の突進歩行に及ぼす影響	高塚 翔太郎	2021年 11月12日	WEB	第9回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
生活リハビリテーションの汎化に取り組んだパーキンソン病患者1例	亀山 莞太	2021年 11月12日	WEB	第9回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
パーキンソン病患者に対する短期間の生活リハビリテーションの効果について	有川 雄大	2021年 11月12日	WEB	第9回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
運動遂行機能低下を呈したパーキンソン病患者に対するLSVT®BIGの実践 ～運動内容の言語化が自主運動獲得へ繋がった1症例～	古川 晃大	2021年 11月12日	WEB	第9回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
パーキンソン病関連疾患患者に対する経口摂取訓練と口腔ケアの有効性	木村 一喜	2021年 7月2日	WEB	第15回 パーキンソン病・運動障害疾患コンgres
在宅での終末期がん患者に対して安楽に過ごして頂く一助となれた症例	諏訪 準	2022年 2月13日	WEB	第31回 福岡県理学療法士学会

業 績

論文・著書等

論文・著書名	共著・共同研究者	発表誌 出版社	巻(号)頁	年号
脳神経内科				
Delays in presentation time under the COVID-19 epidemic in patients with transient ischemic attack and mild stroke: a retrospective study of three hospitals in a Japanese prefecture	Tanaka K, Matsumoto S, Nakazawa Y, <u>Yamada T</u> , Sonoda K, Nagano S, Hatano T, Yamasaki R, Nakahara I, Isobe N	Front Neurol		2021
ラクナ梗塞後に多発する脳出血を来したアミロイドアンギオパチーの一部検例	柳田恵理子, 杉田保雄, 大島孝一, 高下純平, 加藤誠也, <u>山田猛</u>	日本早期認知症学会誌	14 (3) 42-47	2021
Efficacy and Safety of Ultrahigh-Dose Methylcobalamin in Early-Stage Amyotrophic Lateral Sclerosis: A Randomized Clinical Trial	Oki R, … <u>Kikuchi H</u> 他多数	JAMA Neurol	79:575-583	2022
褥瘡対策委員会				
看護の現場ですぐ役に立つスキンケアの基本	皮膚・排泄ケア認定看護師 梶西みちこ	秀和システム		2021

TQM活動

サービス向上委員会

2021年度TQM活動発表大会結果

賞	サークル名	部署	活動テーマ
最優秀賞	めざせ！ミニマリスト！ (検査科)	検査科	在庫を減らしてコスト削減
優秀賞	うんこマスターズ	2階北病棟	これであなともうんこ♪マスター ～うんちは漏れても記入はもらすな～
奨励賞	GO TO SENSHI (穿刺 / 戦士)	血液浄化 療法セン ター	透析開始時のルール決を詳細化し 透析開始をスムーズに行う

2021 年度 村上華林堂病院年報

発 行：2022 年 7 月

編 集：病院年報編集委員会

委 員 長：司城博志

委 員：江口敦美

：北野晃祐

：久間伸彦

：西島勝也

：宮原美佐
